

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（三）

〔調査報告掲載にあたって〕

同朋大学仏教文化研究所では、二〇一六年度以降、岐阜県各務原市の西厳寺が所蔵する諸資料のうち、同寺の前住職であり、龍谷大学で教鞭をとった中国仏教史学者小川貫式（以下、貫式と略す）が、日中戦争時、浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派、もしくは西本願寺と略す）の興亜留学生として中国にわたり、活動を進めながら作成・蒐集した資料を対象に、逐次、その調査分析を進めてきた。学術調査の報告書などもなかには含まれているが、多くは覚書のような自筆メモやアルバムに貼付された写真類であり、ともすれば単なる遺品として見過ごされてしまうかもしれないこれらの資料を、文字通り、歴史を語る上での「史料」として価値づけることはできないか、その方途を懸命に探ってきた¹⁾。

それでは、「小川貫式資料」に対し、このように史料性を見出そうとする、その動機はどのようなところにあるのかというと、まず、ひとつには、戦争と学問との関係を具体的に示してくれる、という点が挙げられる。歴史の研究者もまた、時代に規定された歴史的な存在にすぎないことは言うまでもないが、戦争という負の記憶のなかでの彼らの役割について考察することは、ほとんどなされてきてはいないように思う。たとえば、貫式と直接関わる日中戦争に目を向けると、陸軍特務機関の主導のもと、侵略先となる中国民衆の心を掌握するという目的で、当時、宣撫工作が盛んに進められており、中国の歴史・文化・思想を把握した

うえで、そこに日本のそれを植え付けていく「文化工作」や「宗教工作」も大いに奨励されたが、その過程には、貫式も含め、多くの人文系の日本人学者たちの関与があつたのである。とすれば、実際にその関与はどのような形で行われ、それは当時の学問の内容にどのように影響したのだろうか。本報告では、西本願寺の興亜留学生として中国入りした貫式が残した資料類を通してこれらを探ることで、近代以降の学問の発展の道程を正しく知り、ひいては、近代学問の客観性・実証性の質そのものを問い直してみる機会としてみたい、と考えている。

もうひとつは、新しいジャンルの史料の発掘である。歴史学は史料に基づいて考察が進められなければならない学問であり、歴史学がさらに発展していくためには、新史料の発見、および、既存史料の読み換えという、この二つが常に大きな課題となるはずである。この意味において、「小川貫式資料」を丁寧に読み解き、そこから何かしらの歴史的知見を得ることができれば、単なる遺品ではなく、これを新たなジャンルの史料として位置づけることも可能なのではないか、と考える。また、本調査の過程では、他に「小川貫式資料」と同種の資料が残されていることもわかってきており、今年度の場合も、貫式の五台山調査の現場に同行していた岩上先天（以下、先天と略す）という画家の遺稿類が、遺族のもとから大量に見つかっている。この先天という画家は、長野県の真宗大谷派寺院の出身で、大谷大学で学び、僧籍を取得しているが、それ以前、東京美術学校の日本画科を卒業したという経歴をもち、詳しい経緯は不

明ながら、貫式の留学当時、北京美術学校教授として中国に居留し、五台山では学術調査を通して貫式とも交流があったとみられる人物である。なお、今回発見された先天の資料中には、日中戦争時、北京で開催された興亜美術展覧会^③への出品作の下図のほか、先天みずからの手になる中国の碑文・仏龕の拓本類も多数含まれていて、今後、さまざまな方面から研究材料とされる可能性も高いとみられる。しかし、これらの資料は、今、調査・整理に着手しなければ、歴史的価値が見出さぬまま廃棄されてしまう危険性があり、「小川貫式資料」を新たな史料として位置づけていくという試みは、こうした同種の資料の発掘も視野に入れたものであることを、ひとこと付言しておく。

なお、調査研究を進めるにあたり、決して忘れてはならないのは、貫式の所属した本願寺派をはじめ、戦争時の仏教界の動向については、たくさんのお優れた先行研究があることである。僧侶としてよりも、学者としての業績が勝っているためか、それらの研究史において貫式の名こそ出てはこないが、日中交渉史や近代仏教史、或いは、本願寺教団史の立場から、明治時代以降、太平洋戦争に至るまで、近代戦争時の僧侶たちの動向を詳細にたどり、検証し、その歴史的意義を明らかにした研究は多い。仮に同朋大学内に限ってみても、早くから東アジア仏教運動研究会を主宰した槻木瑞生氏や、昨年度以来、協力を仰いでいる新野和暢氏など、有意義な研究成果が蓄積されており、分析視座はやや異なるが、本調査報告は、直接的にせよ、間接的にせよ、こうした先行研究の上に

成り立っていることを確認し、強調しておきたいと思う。

最後に、今年度の報告の構成について触れておくと、今回は「小川貫式資料」のうち、南京関係の資料類に焦点をしばらく、それらを紹介することを主眼としている。当初、本調査は三年計画で進められ、最終年度となる本年度は統括的報告を掲載する予定であったが、「小川貫式資料」をめぐる調査研究が、二〇一八年度の日本学術振興会科学研究費の助成事業に採択され、海外にも調査の範囲を広げて、改めて当該資料の分析を試みることになったからである。そこで、本年度は、貫式の留学直後、すなわち昭和十四年（一九三九）以降の南京逗留期の資料に着目しつつ、西本願寺南京出張所（後の南京別院）、および、南京仏学院を考察のポイントとして、現時点で得られたかぎりの知見を論文としてまとめ、問題提起に替えることとした。具体的には、「小川貫式資料」のうち、南京関係資料を用いて藤井が、また、これを補完するものとして、貫式と同じく南京仏学院の講師であった山口出身の布教使、亀谷法城（又は走入法城。以下、法城と略す）の関係資料（西巖寺寄託。以下、本報告では「亀谷法城資料」と仮称す）を用いて中川が、それぞれ南京仏学院について論じている。さらに、この「亀谷法城資料」も含めて、本報告で研究対象とした南京関係資料の一覧を、藤井・小川・中川・日比野で作成し、主要なものについては写真を併せて掲載することで、両資料について周知を図るとともに、来年度以降の海外調査にむけての下準備とした。先に述べたように、本研究では「小川貫式資料」を補完する、もしくは、まだ

知られていない同種の資料類の発掘をも視野に入れており、南京仏学院を共通項とする「亀谷法城資料」も本報告に盛り込むこととした次第である。ちなみに、現在、西巖寺に寄託されている「亀谷法城資料」は、十年ほど前、新潟大学の柴田幹夫氏、龍谷大学の野世英水氏が、関係者の許可のうえ、法城の自坊であった明楽寺（山口県熊毛郡田布施町）の住居スペースから発見したものである。日中仏教交渉史、アジア開教史の分野において、両氏には秀でた業績があり、「小川貫式資料」調査に関して、これまでも適宜、ご教示を賜わってきたが、今回もまた「亀谷法城資料」の本報告への利用を快く認めてくださった。両氏の幾重ものご厚情に、心より感謝申し上げます。

以上、西巖寺蔵の「小川貫式資料」の調査報告の第三弾を掲載するにあたって、改めて本調査のスタンスについて述べてきたが、本論の内容も含め、今後も専門の研究者の方々からご意見、ご叱正を賜わりつつ調査を進めていきたい、と考えている。その点では、今年度、大谷大学の井黒忍氏の計らいで、同学の真宗総合研究所国際仏教研究東アジア班の研究会において、「小川貫式資料」の調査経緯について発表する場をいただいたことは、調査のより一層の充実に向けて非常によい勉強の機会となった^⑩。これからもこうした機会を得ながら、同資料に興味を持ってくださる方々に資料情報を開示し、議論を交わしていただけるような環境づくりにつとめていきたい、と考えている。

（文責藤井）

注

- (1) 西巖寺蔵「小川貫式資料」については、同朋大学仏教文化研究所を母胎として、歴史学（古代・中世・近代）、仏教学（日本・東洋）など、当該資料に興味を寄せる研究者の協力を得て、現在までに三年間にわたって調査が行われてきた。各年度の調査メンバーは以下の通りであるが、調査メンバーは必ずしも固定的ではない。二〇一六年度・小川徳水、工藤克洋、高木祐紀、中川剛、藤井由紀子。二〇一七年度・大艸啓、小川徳水、花榮、北村一仁、工藤克洋、高木祐紀、中川剛、新野和暢、日比野洋文、藤井由紀子。二〇一八年度・花榮、梶浦晋、北村一仁、中川剛、新野和暢、日比野洋文、藤井由紀子。また、調査過程で得られた知見については、以下のように、問題提起も含めて、論文・史料翻刻・史料リストの形で研究所紀要に掲載してきた。藤井由紀子・中川剛・高木祐紀・小川徳水・工藤克洋「特別調査報告 西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（一）」〔同朋大学仏教文化研究所紀要〕第三十五号、平成二十九年三月。藤井由紀子・小川徳水・北村一仁・大艸啓・工藤克洋・高木祐紀・中川剛・新野和暢・花榮・日比野洋文「特別調査報告 西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（二）」〔同朋大学仏教文化研究所紀要〕第三十六号、平成二十九年十二月。さらに、二〇一六年度、および、二〇一八年度（本年度）には、ギャラリーで関連する展覧会を開催し、問題を人口に膾炙するような工夫も試みている。『戦時下の中国仏教研究―西巖寺蔵「小川貫式資料」と山西省調査記録』（同朋大学仏教文化研究所、平成二十八年十二月）。『戦時下の中国仏教研究Ⅱ―石壁山玄中寺復興と「小笠原宣秀資料」』（同朋大学仏教文化研究所、平成三十年七月）。
- (2) 当時、北京美術学校の校長には、同じく東京美術学校卒の服部亮英が就任していた。
- (3) 興亜美術展覧会は、興亜精神のもと、中国の近代美術振興のため、新民会（日中戦争後に日本軍が樹立した中国臨時政府を擁護するために設立された中国民衆教化団体）によって開設されており、やはり宣撫工作の意味合いを強く帯びていたことは疑いがない。さらに、先んず北京漫画協会を通して興亜院とのつながりもあったなど、今

(4) 後、貫式の中国における人間関係についての考察は、開教や仏教調査といった枠組みだけでなく、美術家や文学者など、学芸全般の関係者に視野を広げて行っていく必要があることを痛感している。

(5) 小島勝氏の論考に、南京仏学院の開学当時を知る人物として、亀谷法城とともに、貫式の談が引用されている程度である(小島勝・木場明志編著『アジアの開教と教育』龍谷大学仏教文化研究叢書Ⅲ、龍谷大学仏教文化研究所、平成四年三月)。

(6) 榎木瑞生「中外日報」紙のアジア関係記事目録(『同朋大学仏教文化研究所紀要』第十七号、平成十年四月)。新野和暢『皇道仏教と大陸布教―十五年戦争期の宗教と国家―(社会評論社、平成二十六年二月)。

(7) 「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫式の記録より」(日本学術振興会科学研究費 基盤研究C 課題番号18K0917、二〇一八～二〇二〇年度 研究代表者藤井由紀子)。初年度は韓国調査を実施した(十月三〇日～十一月四日)。具体的には、日本統治期の朝鮮半島の諸問題に詳しい長石正道(本願寺派浄徳寺住職)、荒木潤(韓国学中央研究院)、両氏の協力を得て、本願寺派の布教所跡のある木浦と慶州を中心に、ソウル、群山、釜山など、各所で実地踏査を試みた。特に、木浦、慶州には当時の西本願寺布教所の建物が現存し、文化財指定も受けているが、現在は別の用途に使われているその内部を、両氏のご尽力により、細部まで見学することが可能となった。両氏には心より感謝申し上げたい。なお、

長石氏には、龍谷大学大学院の修士論文として「本願寺教団の朝鮮新出―明如期を中心として―」(龍谷大学、平成二十五年三月)が、慶州在住の荒木氏には、日本統治期の慶州古蹟調査と西慶寺(西本願寺慶州布教所)について論じたものとして、荒木潤「日本統治期慶州日本人移民に対する微視的考察―慶州邑西慶寺の成立過程を中心に―」(『次世代人文社会研究』第九号、日韓次世代大学学術フォーラム、東西大学校日本研究センター、二〇一三年三月)がある。荒木氏によると、当時、慶州の布教所には日本からの移民が集っていたが、その中心には総督府博物館長の諸鹿央雄と、慶州の日本人街

(8) の有力者であった柴田團九郎の存在があったという。研究対象としている時代は異なるが、氏の研究は戦時下の学術調査を研究テーマとする本報告にとっても非常に有意義な視座と内容を持つ研究であると考ええる。

(9) 南京での現地調査は来年度実施する予定としている。本報告で「亀谷法城資料」と仮称して用いているものは、法城の自坊であった明楽寺に残されていたものではあるが、アルバムと「南京仏学院だより」というニューズレターのほかは、戦前の手記や日記、書簡などで、そのすべてが南京逗留時代のものというわけではない。したがって、小島勝氏が南京仏学院について詳細に論じた際(小島勝「本願寺派開教使の日本語教育」、註4前掲書)、明楽寺から借りたという「南京仏学院概況報告」や「南京仏学院一覽」なども、ここには含まれていない。しかし、中川の論考にもあるように、山口の田布施近辺は、赤松連城をはじめ、近代の本願寺派にとっての重要人物を輩出したという意味では特異な土地柄である。海外開教に携わった布教使の、その前史を知るといふ意味において、本報告ではまずは法城という人そのものに着目し、上記の資料を活用してみたい次第である。

(10) 藤井由紀子「日中戦争下の学術調査と仏教―新出の「小川貫式資料」を中心として―」(大谷大学真宗総合研究所国際仏教研究東アジア班研究会、平成三十一年二月十五日)。本発表では、参加くださった諸氏より、本紀要の報告を通して過去考察してきた事柄は仮説段階にすぎず、今後はもっと広汎に比較資料を求めて、「小川貫式資料」の内容を実証する必要性のあることを、さまざまな角度から指摘いただいた。真宗総合研究所国際仏教研究東アジア班の方々には心よりお礼を申し上げます。

古林律寺と南京仏学院——西巖寺蔵「小川貫式資料」南京関係資料をめぐって

藤井 由紀子

はじめに

二〇一六年度以降、三年間にわたり、同朋大学仏教文化研究所に所属する若手研究者らとともに、岐阜県各務原市の西巖寺に蔵されている「小川貫式資料」の調査研究に従事してきた。小川貫式（以下、貫式と略す）は、龍谷大学で教鞭をとった中国仏教文化史の研究者で、特に大藏経の研究で知られているが、その住坊であった西巖寺には、本堂脇に観桜庵と名付けられた貫式の書斎が離れとしてあり、そこに貫式の蔵書類（和書・洋本・大藏経断簡など）が、現在も所狭しと詰め込まれている。そして、それらに混じって残されていたのが、大学院修了後、浄土真宗本願寺派（以下、本願寺派、もしくは、西本願寺と略す）の興亜留学生として日中戦

争下の中国に渡り、活動したときの記録類であった。このなかには、太原崇善寺における大藏経調査時の記録を陸軍用便箋に書き込んだようなものもあり、特にこれらを「小川貫式資料」と名称したうえで、急遽、調査に着手することにしたのである。

調査着手から三年が経過したが、まだ資料整理は完了する気配を見せていない。というのも、貫式には、研究の際、さまざまな事柄を書きつけておく癖があり、膨大な自筆メモ類が残されていたということと、自己の記憶の助けとするためか、或いは、記念としての意味があるためか、留学時に作成された自筆原稿・メモ・写真以外にも、切手・絵葉書・紙幣・切符・パンフレットはむろん、貫式が関与した機関や行事に関する印刷物まで、ありとあらゆるものをスクラップブックに貼って保存して

いたからである。全貌が見えぬまま、調査を進め、まずは二年をかけて貫式が山西省で行った學術調査に関わる資料に目を通すことに注力したが、^②調べを進めるうちに、山西省で活動するよりも以前、留学直後から貫式は南京に二年間逗留しており、南京仏学院の講師という形で、日中戦争下、本願寺派の開教事業に尽力していたことも次第にわかってきた。

そこで、本稿では、「小川貫式資料」のうち、南京逗留期のものをつくつかりあげ、その内容に基づいて、どんな歴史的事項がそこから見えてくるのか、考察を試みることにした。主に、西本願寺南京出張所（後の南京別院）、および、南京仏学院を考察のポイントとして、日中戦争下の本願寺派の開教事業と、そこに興亜留学生という立場で寄与した若き仏敎史学者の姿を追いかけてみたい、と考えている。

一 興亜留学生としての小川貫式——日中戦争下の南京への赴任

昭和十二年（一九三七）十二月一日、中華民国（以下、中国と表記）の首都南京を攻略せよとの命令が下り、同月十三日、日本軍の侵攻により南京が陥落したことは、十五年続いた日中戦争のなかでも最大の出来事としてよく知られている。その南京陥落から約一年半後、昭和十四年（一九三九）四月に、貫式は西本願寺の興亜留学生として中国へと派遣され、南京の地で二年間を過ごすこととなった。後に回顧したものにはなるが、貫式が当時のことを綴った手記には、彼が南京入りした経緯が次のよう

に記されている。

昭和十四年三月研究科を「南宋仏敎史研究」と題し、敎団篇と教学篇の二冊にまとめて卒業が出来た。時恰も日本は大陸進出の戦時体制であり、本願寺において中国に開教師派遣が盛んとなるにつれ、興亜留学生を募集して中国大陸の仏敎事情を調査研究する必要性が認められ、北京へは三上諦聴、新野修基、中支へは私と海野の二人が派遣されること、なったこれは禿氏西光高雄諸敎授の推薦によるものであった。

昭和十四年四月上海に上陸し上海別院の小笠原彰眞開敎総長のもとで南京派遣が命ぜられ、南京の太平路白菜園の西本願寺出張所横湯通之主任のもとで厄介になり鳳山古林律寺に入り中国僧と共に南京仏学院の起立生活をする^③こと、なった。大学で書物を通じて理解していた中国仏敎と現実に中国の律寺に入つて中国僧と共同生活をしてみると全くその問題が複雑で相違することを痛感し、根本的に研究方針を改める必要にせまられ、中国仏敎の現状からその歴史をさかのぼる必要にせまられた^④。

※文字の囲みや傍線はすべて貫式自身による（原文は横書き）

昭和十四年（一九三九）四月、興亜留学生として渡中した貫式が、最初に中国大陸の土を踏んだのは上海の地であった^④。航路、まず上海に入

り、その上海において小笠原彰真（以下、小笠原と略す）と面会する。この小笠原は、当時、西本願寺上海別院の輪番であり、かつ、本願寺派の中南支布教総監・開教総長をつとめるなど、同派の要職に就いていた人物である。そして、貫式は、その小笠原から南京に行くよう命じられ、同年六月以降、横湯通之（以下、横湯と略す）⁶がトップをつとめる西本願寺の南京出張所⁷の駐在となり、さらには同派が運営する南京仏学院において教鞭をとることになった。南京仏学院というのは、南京攻略後、城内の古刹、古林寺（古林律寺）の境内に開設された中国人青年僧侶の養成機関であるが、それゆえ貫式はこの古林寺で中国僧らと起居生活をもしながら、仏学院の講師として二年間の日々を送ることとなったのである。

さて、このように、貫式の中国留学は「興亜留学生」としてのそれであったことがわかるが、ここにいう興亜留学生とは、文字通り、興亜のため、西本願寺が日中戦争下の中国に派遣した留学生のことを指す。事変勃発以後、昭和十三年（一九三八）十一月の「東亜新秩序」声明（第一次近衛内閣）⁸、そして昭和十五年（一九四〇）七月の「大東亜共栄圏」構想（第二次近衛内閣）と、日本中心の東アジア世界建設を目指した領土拡張政策が政府によって着々と進められていくなか、日本仏教界の各宗派・各団体もまた、興亜を冠した運動や事業に力を入れはじめようになった、そうした動向と興亜留学生は密接に結びついている。⁹

たとえば、西厳寺蔵の「小川貫式資料」のなかには、「研究題目 東

亜近代仏教の歴史的研究」という、貫式が渡中当初の調査研究計画を簡条書きにしたものが含まれている。天真堂製¹⁰の原稿用紙、わずか一枚に記されたものではあるが、その項目を見ると、

調査項目

中華民国以降ノ仏教状況（（現代支那宗教）
一般的状況）

国民政府ノ宗教行政ト仏教

仏教会―念仏結社

仏学院―仏教教育事業

仏教図書館ト仏学研究会

仏教社会事業 孤兒院、施療医業、
義井、義墳 ¹¹

とあり、貫式が元來得意としたはずの古寺や仏教史跡は調査対象とはされず、中国の宗教、特に仏教の現況把握に主眼が置かれていることが注目される。これは、先ほどの手記に、古林寺で中国僧と生活を共にするなかで「中国仏教の現状からその歴史をさかのぼる必要性」を強く感じたと述べられていたこととも呼応するが、貫式がそう痛感するようになった背景には、当時、南京を含む中支地域において宗教工作の気運が高まりを見せており、その中心に上海別院の小笠原の存在のあったことが大きく影響しているとみてよい。

そのことは、貫式が中国入りする直前、昭和十四年（一九三九）二月

に、中国における宗教工作の推進を目的として、中支宗教大同連盟が発足していることに象徴される。すなわち、同連盟発足に至るまでの経緯を詳しく論じた松谷暉介氏、および、新野和暢氏の研究を踏まえると、昭和十三年（一九三八）七月、軍特務部・特務機関と上海の宗教関係者により宗教対策座談会が開かれたことが中支宗教大同連盟構想の発端で、その後、上海特務部を統括していた原田熊吉による「中支宗教工作要領」のなかで、宗教工作を統制・推進する機関として同連盟の結成が改めて提議されたとい¹²、これをうけて、十月二日、上海で連盟結成準備委員会が開かれたが、その際、委員長（会長）を務めていたのが小笠原であり、つづく十二月八日に開催された文部省宗教局の協議会でも、小笠原は同連盟を代表してこれに参加していたのだとい¹³。ちなみに、この中支宗教大同連盟は神道部、仏教部、基督教部、総務局で構成されていたが、小笠原はこのうち総務局長の座に就いている¹⁴。

以上のように、「東亜近代仏教の歴史的研究」という研究テーマのもと、貫式が計画した中国仏教の現況調査は、中支地域で宗教工作のための準備が着々と進められていたことと、決して無関係ではない。他にも、「小川貫式資料」中には、「日華仏教連盟結成総会並大会秩序表¹⁵」という謄写版刷りのプリントがあるが、この日華仏教連盟とは、昭和十四年（一九三九）四月、南京に進出した日本仏教各宗派（本願寺派、大谷派、浄土宗、日蓮宗、本門本法華宗、曹洞宗）が組織した日華仏教連合会を中枢として、南京仏教会をはじめとする中国側の仏教団体（蒙藏章嘉事務所・西藏班禪

駐京弁事処・中国安清同盟）が加盟してできた連合組織で、本部は南京に置かれ、かつ、中支宗教大同連盟仏教部の管轄下にあった組織でもあったとみられる¹⁷。また、「小川貫式資料」には含まれていないが、昭和十四年十二月、南京の日本居留民会の上に設立された南京青年会の発行誌、『南京青年』の第二号には、「大和」——中国青年僧と伍して——と題された南京出張所の横湯の一文があり、そのなかにも、

南京青年会々々員である小川貫式君が京都の龍谷大学史学研究科を出てすぐかけつけて呉れたので、古林寺に放戒（中国僧尼の授戒会）が始まったのを幸ひに彼等の寺廟生活調査傍々宿り込みで学院開設は可能か付うか研究してもらつたのです¹⁸。

という興味深い記述を見つけることができる。この横湯の寄稿文については、第三章で南京仏学院について論じる際に改めて紹介していくが、「東亜近代仏教の歴史的研究」という研究テーマは、より具体的には、本願寺派の中国開教の大きな柱の一つであった、南京仏学院の開学準備に貫式が携わるなかで見出されたものであったことが、ここからは見えにくる。ただし、この調査研究が実際の程度まで進められたかについては、残念ながら「小川貫式資料」中にも対応するものがなく、不明といわざるをえない¹⁹。しかし、中国仏教史を専門とした貫式の研究調査は、その学識に基づいて行われたであろうことは想像に難くなく、こうした

学術的知見に裏打ちされた、質の高い実態調査の実施こそが、日中戦争下に派遣された西本願寺の興亜留学生たちに本来期待されていたものだったのだろう。²⁰⁾ 日本の宗教文化を中国に受容させるという宗教工作の推進をうけ、仏教各宗派でも中国開教が喫緊の課題となるなか、西本願寺では開教事業に向けての情報収集要員として、龍谷大学出身の若き研究者を中国に派遣し、中国仏教の現況調査にあたらせた、それが貫式たち興亜留学生だったのである。²¹⁾

ちなみに、同じく貫式の手記によれば、貫式を含め、この時に中国へと派遣された興亜留学生たちは、龍谷大学教授であった禿氏祐祥、西光義遵、高雄義堅、三氏の推薦によって選ばれたといい、三上諦聰と新野修基は北支に、海野昇雄と貫式は中支に、それぞれ向かうことになったらしい。ただし、留学三年目となる昭和十六年（一九四一）三月には、新野が北支から中支へと移り、杭州地域の仏教の実態調査に着手する一方、²²⁾ それと入れ替えに貫式は北支へと移って学術調査を開始しており、興亜留学生としての調査活動は、その範囲も、その内容も、実際には流動的であったとみられる。²³⁾

それでは、興亜留学生として中支に派遣され、南京出張所の駐在として南京仏学院の講師となった貫式は、南京でどのような日々を過ごしたのだろうか。現在、西厳寺に蔵された「小川貫式資料」のうち、南京関係のものはおよそ六十五点を数えるが、次章ではこれら資料の概要を紹介し、その史料としての歴史的価値について探る、そのための端緒を開

いてみたいと思う。

二 貫式が遺した南京関係資料

——西厳寺蔵「小川貫式資料」より

前章では、戦後に記された貫式自身による手記の内容に基づいて、一部、南京逗留時代の資料と照らし合わせながら、西本願寺の興亜留学生として中国に渡った貫式が、南京出張所に駐在し、南京仏学院の講師に就任するまでの経緯について確認した。次に、本章では、西厳寺蔵の「小川貫式資料」のうち、日中戦争下で作成され、かつ、南京逗留当時の貫式に大きく関わるものに注目することにしたい。むろん、六十五点すべてをここで取り上げることができないが、できうる限り、その概要を記して、これらを「史料」として価値づけていくための基礎作業としていければ、と考えている。

それでは、西厳寺蔵の「小川貫式資料」のうち、南京関係の資料にはどのようなものがあるのだろうか。本調査報告のベースとなっている当該資料については、一昨年、山西省関係のものに焦点をあて、戦争下で貫式が行った学術調査について考察を試みたが、その際、自筆原稿類（草稿・手記・メモなど）、写真類（アルバム・スクラップブック貼付）、当時の刊行物（アルバム・スクラップブック貼付／新聞記事切り抜き、陸軍・新民会が発行したポスター・レジュメなど）という形で、資料を大別しながらそ

の内容を紹介した。²⁴ 点数は決して多くないものの、今回の南京関係の資料もそれはほぼ同様で、自筆原稿類のほか、写真・繪葉書類、当時の刊行物など、自筆原稿以外はスクラップブックやアルバムに貼付された状態で今日まで残されてきた（本報告別稿「南京関係資料一覽」を参照のこと）。ただし、二年間の長逗留となった南京の場合、私信類も少なからずあり、山西省関係資料とはその点が少し異なっている。

そこで、まず自筆原稿類から見ると、これらは南京で入手した原稿用紙やその裏面に書かれているものがほとんどで、草稿的なもの、すなわち一応の文章になっているものと、メモ書き程度のもの、すなわち、文献の抜粋や覚書を無造作に書きつけたものとさらに分けることができる。ただし、前者の場合、その後、必ずしも成稿して刊行されているわけではなく、書きかけのまま終わっているものも少なくない。²⁵ 内容に目を向けると、棲霞山に関するもの、大明南蔵（大蔵經）に関するもの、居士仏教に関するものが主であるが、貫式本来の関心を投影して、大半が大蔵經に言及している。

その意味では、棲霞山関係のもののうち、「日華仏教連盟結成總會並大会秩序表」の裏に、棲霞山で大明南蔵の一部を発見したことを書きつけた、「大明南蔵始末攷」というメモ書きは、貫式の南京逗留時代の學術調査の様子を示していて興味深い。

大明南蔵始末攷

明代の官版大蔵經については南北両蔵のあることは悉知のとおりである。だがこれについては従来宋元版大蔵經の彫印の如くには詳にされてゐない。寧ろ明代ではこれ等の南北両官版大蔵經よりも従来の白華經典より發達した折本式のものより一般典籍と同じ方冊本の形成を創めた武林蔵（佚蔵）に倣つた読書人への仏典印刷の方がはるかに歴史的にも社会的にも有名である。これは我国にも影響して黃檗鉄眼の一切經の覆刻を見たことや広く一般人の手に仏教の聖典として流布したからである。

然し大明南蔵仏典は北宋以来南宋、元代にかけて福建、浙江、福州東禪寺等 院、思溪円覚法宝寺、磧沙延聖寺、普寧円寺の各地で出来た折本大蔵經ノトウ尾を飾るものとして、又明清両代の北京二大官版仏典の母胎となることからしても一度はその雕版とその特色を攷へることも法宝流伝史の一齣として決して無駄でないと思ふ。昨年初夏棲霞山に於いてこの大明南蔵殘典を発見した。この南蔵の雕印版を蔵した南門外雨花台の大報恩寺の住持本明師とも面知のなかなので再三その寺に遊び經蔵址を調べこの南蔵の雕印をまとめることにしたわけである。この一文については龍池清氏が鼓山怡山蔵逸仏書録の記すに依ること大である。記して謝意を表する次第である。筆者の見た棲霞山の南蔵は鼓山蔵經の如く完全なものでなく殘焼本で刊記識語も乏しい。²⁶

これがその全文であるが、貫式が棲霞山で大明南蔵の残典を発見したことや、大明南蔵を所蔵する報恩寺にもたびたび出入りし、住持とも懇意にしていたことなどが書きとめられている。また、この棲霞山での大明南蔵発見の件は、「棲霞山の大明南蔵仏典²⁷⁾」というメモ書きでも触れられているが、そこには他に、中日文化協会²⁸⁾から求められ、棲霞山をテーマに執筆する運びとなったことも記されている。果たして、昭和十六年（一九四一）発刊の『中日文化』日文版創刊号には、「棲霞の懐古」という貫式の随筆が掲載されているほか、その前年には『南京青年会叢書』の第一輯として、ガイドブック的なものながら、貫式の執筆による『棲霞山史蹟』という本も刊行されていて、貫式の棲霞山研究の成果の一端をのぞかせている。

これに対して、居士仏教に関するものは、貫式の本来の関心に根差した研究ではなく、やはり興亜留学生として中国開教事業に関わるなかで研究テーマとされていったものだとみてよい。というのも、在家と同様、僧侶が肉食妻帯の日常生活を送る浄土真宗の宗風は、仏教の戒律を厳しく重んじる中国で開教事業を進めていく際の大きな障害になった、と考えられるからである。ところが、その一方で、在家の仏教信徒である居士の存在感は中国でも大きく、事実、貫式が起居した古林寺でも、楮民誼や陳羣といった南京国民政府の要人たちが、居士として古林寺の戒壇復興に大きく寄与している。おそらくは、南京仏学院を通して開教事業に携わるようになった貫式を取り巻く、そうした現実の環境が彼の居士

仏教に対する関心を醸成したのだろう。

つづいて、写真類に注目すると、貫式は南京時代に入手した資料や写真・絵葉書を四冊のアルバム、もしくはスクラップブックに貼付した形で残しており、それらのうち二冊に、計二百枚を超える数の写真を見出すことができる。まず、表紙に「PHOTOGRAPH ALBUM」と印字された一冊は、台紙が十二枚で、棲霞山の舍利塔や千仏巖、その周辺に所在する報恩寺や甘家巷の蕭秀墓・蕭愴碑など、貫式が訪れた南京の史跡の写真で構成されており、自筆原稿の内容ともよく対応している。また、背表紙にフェルトペンで「スクラップブック」と手書きされた一冊は、台紙が三十八枚で、南京仏学院と、これが置かれた古林寺、そして、後に南京別院となる西本願寺出張所など、貫式が職場とした南京仏学院関係の写真で構成されている。仏学院の学生なのだろう、詰襟の日本式学生服を着た青年たちもたくさん写っているほか、何かの式典の様子などを撮影したものもあるが、写真にはキャプションが付されておらず、これが具体的に何の行事を撮影したものなのか、そもそも南京で行われた行事を撮影したものなのか、にわかには判断することができない。なかには裏に記載のある写真もあって、たとえば「かんのん一週年法会／びる寺にて」と記載されていることによって、南京毘盧寺の観音一周年記念行事だと判明するものもあるが、その場合でも、それが他の写真のどこまでに適用されるか、現段階では判断とせず、これについては、今後、補足調査で明らかにしていければ、と考えている。²⁹⁾

つづいて、新聞の切り抜きを含む刊行物について見ていくと、これらもまたスクラップブックに貼付されて今日まで残されてきた。すなわち、「小川貫式資料」の南京関係のものには、上記のアルバムとスクラップブック二冊のほかに、表紙と背表紙に「SCRAP BOOK」と印字されたものがあと二冊あり、一冊は台紙が二十枚で、貫式への私信とともにたくさんの切り手や紙幣が貼付されているが、私信に混じって南京仏学院の入学式や卒業式の招待状なども、ここにはスクラップされている³⁵⁾。もう一冊は、台紙が三十枚で、大半が絵葉書で占められたそのなかに、南京仏学院関係の新聞記事の切り抜きや関係資料が貼りこまれている。特に注目すべきものは、貫式が執筆した古林寺復興に関する新聞連載記事³⁷⁾で、「南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興」と題され、同様の内容を日本文と中国文とで、日本の新聞と中国の新聞、それぞれに掲載していたことがわかる。なお、この新聞記事を後に改めて別刷したと思われるものもスクラップブックには貼付されており、次章で述べていくように、「天下第一戒壇」という古林寺のブランドが、南京仏学院の開学に大きく影響していたことをうかがわせていて非常に興味深い。

さらに、もうひとつ、目を引くものとしては、昭和十六年（一九四一）三月五日付で南京総司令部によって作成され、かつ、「極秘」という朱判の捺された、「西尾大将南京市内名勝視察予定」がある。A4サイズの、たった一枚の予定表であるが、西尾大将なる人物の三日間の視察予定が記されたそこに、案内者の一人として貫式の名前が登場している。

〔極秘・朱印〕 西尾大将南京市内名勝視察予定

昭和一六・三・五

南京総司令部

月日	出発時刻	視察	説明者
六日	一〇、〇〇 (官邸)	北極閣(20分) ↓ 鶏鳴寺(20分) ↓ 博物館(60分) ↓ 総司令部(一二〇〇頃)	多摩部隊 佐藤少佐
七日	一〇、三〇 (官邸)	中山陵 ↓ 総司令部(一二、〇〇頃)	
八日	一一、〇〇 (官邸)	古林寺(20分) ↓ 清涼寺(20分) ↓ 掃葉楼(20分) ↓ 総司令部(一二三〇頃)	西本願寺 小川貫式

38)

ちなみに、ここにいる西尾大将とは、昭和十四年（一九三九）に陸軍大将となり、新設された支那派遣軍総司令部で総司令官をつとめた西尾寿造のことだとみられる。南京は中華民国の首都が置かれた地であり、陥落後も汪兆銘によって樹立された新国民政府の中樞をなしていたため、当然、南京時代の貫式を取り巻く環境も、想像以上に政治的な色合いが濃いものがあつたのだろう。

最後に、私信類であるが、私的な事柄を多く含むため、本稿ではその内容については措いておくが、封筒の差出人に着眼すると、本派本願寺中南支布教総監部（上海乍浦路四七一号）、日華仏教連盟總會（南京太平路三百三十号 南京寺内）、国民政府宣伝部（室伏クララの名刺在中）、南京市政

府、北京本願寺、棲霞寺、金陵寺、毘盧寺、靈巖寺、鎮江金山大観音閣、高雄義堅、杉紫朗、西光義遵、宇野圓空（以上、三名、龍谷大学）、加藤繁（東京帝国大学）、横湯通之（南京西本願寺）、果言、谷口法行（以上、南京仏学院）、海野昇雄（興亜留學生）といった名称や名前が並んでいる。このように、一部をピックアップするだけでも、貫式の置かれた当時の状況がそのまま投影されるところに、私信というものの面白さがあるように思う。

以上、十分とはいえないが、西巖寺蔵の「小川貫式資料」のうち、目立ったものをいくつか取り上げて紹介してみた。なお、西巖寺には当該資料の他にも、『棲霞寺志』、『古林寺志』、『金陵刻経処流経典目録』、『金陵梵刹志』、『首都志』など、南京の仏教史を考察する上で欠かせない古書が蔵されている。³⁹ 全てではないが、「北京留学二際シ南京ヨリ日本ニ発送セシ典籍」⁴⁰と題された貫式自筆の目録に書名が見えるものもあり、これらのなかには南京時代に購入したのも確実に含まれている。厳密には「小川貫式資料」とは呼べないかもしれないが、こうした古書類も一応、別稿の資料リストには挙げておいた。あわせて参照されたい。

三 南京仏学院と古林律寺

——「天下第一戒壇」の復興と宣撫工作

本章では、「小川貫式資料」を通して、南京仏学院について改めて考

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（三）

察する。南京仏学院に関する既存の研究においては、本願寺派開教使の日本語教育を論ずるなかでこれに触れた、小島勝氏のものが最も詳しい。⁴¹ 写真も交えながら、創立経緯、運営方針、組織的位置づけ、経営状況、教職員メンバーなどを、順序立てて、かつ、具体的に論じつつ、南京仏学院を「現地人の僧侶養成機関として、制度的にも組織的にも整備された機関」と評しているが、実はその詳論は、山口県熊毛郡田布施町にある明楽寺の住職で、開学当初から貫式の同僚として南京仏学院の講師をつとめた、亀谷法城（走内法城とも。以下、法城と略す）の元にあった資料によって可能になったものである。⁴² 以下、南京仏学院と貫式の関係について考察していくにあたっては、本稿でも随時、小島氏の引用した資料によりつつ考察を進めていくことにしたい。

南京仏学院は、昭和十四年（一九三九）七月一日、南京城内の西康路にある古林寺境内に開設された。「小川貫式資料」中には、前章でも紹介したように、鮮やかな朱紙に金字で印刷された、ひとさわ目立つカード状のものがスクラップブックに二枚貼付されているが、そのうちの一枚には、

〔表紙〕南京仏学院緘 地址西康路古林寺内

〔見開〕謹於七月一日上午十時在古林寺南京仏学院挙行開学

典礼屆時勿悞務請

駕臨指導 南京西本願寺横湯通之謹訂

是日潔備粗筵礼成後即請午餐 席設古林寺

南京仏学院開業典禮秩序

- 一、振鈴集合
- 二、全体肅立
- 三、向仏前行三鞠躬礼合掌静黙三分鐘
- 四、主席報告籌備經過
- 五、創立者致詞
- 六、院生代表朗誦誓約
- 七、授与院生証
- 八、創立者訓詞
- 九、來賓訓詞
- 十、本院教師訓詞
- 十一、主席答謝詞
- 十二、向仏前行三鞠躬礼
- 十三、撮影
- 十四、礼成散会⁽¹³⁾

とあって、「開学典禮」の表記から、これが南京仏学院の開院式（入学式）の招待状だとわかる。差出人表記が「南京西本願寺横湯通之」となっていることから推すと、おそらくこれは昭和十四年に行われた第一回入学式のものであったと考えられる⁽¹⁴⁾。では、この南京仏学院はどのようにし

て開学に至ったのだろうか。これについては、同年十二月に発行された『南京仏学院概況報告』（明楽寺旧蔵）にその経緯が順を追って示されている。すなわち、

東亜ノ諸民族ガ共通ニ信奉セル宗教思想ヲ以テ各々提携ヲナシ宗教上ニ一大鞏固ヲ結ブコトハ防共対策ノミナラズ興亜ノ新秩序ノ推進力トシテモ必要欠ク可カラザル一大急務ナリ。コレガ実現ニハ正シキ信仰ノ指導員ヲ必要トシ 先ヅ中国青年僧ノ知識体位ノ向上ヲ目的トナス養成機関ノ設立ガ日華両仏教界ヨリ待望サル、ニ至レリ、斯ル要求ノ下ニ南京仏学院ハ本年初頭ヨリ創立ノ趣意ガ具体化シ既ニ三月一日付ヲ以テ中支宗教大同連盟ヨリ開設ノ許可ヲ受ケタリ、四月 日華仏教連盟南京總會ノ結成ヲ見ルヤ南京仏学院ハ仏教連盟ノ教育機関トシテ其文化事業ノ一ニ加ヘラレ専ラ南京本願寺ガコノ経営ヲ担当スルコトヲ委嘱サレタリ、愈々五月十六日南京特務機関ニ学院開設ノ出願ヲナシ、六月一日より南京城内西康路鳳山古林寺ノ一隅ヲ仮院舎トナシ創設準備ヲ開キ学生ノ募集ヲ始メタリ、院生ノ募集ニ就イテハ、南京特務機関並ニソノ管下ノ各地班ノ援助ヲ受ク

南京城内ハモトヨリ棲霞山、丹陽、江北に於イテハ揚州ヲ中心トシテ江都、高郵、儀台ノ各地ヨリ十四歳以上二十五歳以下ノ青年僧ニシテ心身共ニ優良ト認メシモノヲ十三名正式学生トシ

テ收容シ学院内ニ寄宿生活ヲ為サシムルコト、セリ、六月二十三日付ヲ以テ南京特務機関長ヨリ南京仏学院開設ノ認可ヲ見テ茲ニ七月一日維新政府、南京特別市政府、在留南京ノ軍官民並ニ日華仏教連盟員等多数ノ参列ヲウケ開学ノ典礼ヲ挙行セリ同月五日ヨリ正式ニ学生ノ授業ヲ開始シ、傍聴ハ年令ノ別ヲ設ケズ隨時許可ヲナシ、中堅尼僧ノ養成機関トシテハ更ニ八月一日ヨリ南京仏学院ノ分院ニ於テ尼僧ノ教育事業ヲ始メ現在ニ及ベリ⁴⁵⁾

とあつて、構想段階から開学までの経緯が比較的詳しく記されている。さらに、昭和十七年（一九四二）六月発行の『南京仏学院一覽』（明楽寺旧蔵）には、

昭和十五年六月廿七日第一回卒業式ヲ挙行、九名ノ正式卒業生ヲ見タリ。ツイテ第二期学生ヲ收容、昭和十六年七月廿六日七名ノ卒業生ヲ出ダセリ。　　（中略）　　本院ハ帝国ノ対支文化諸方策ノ根本方針ニ即応シテ、広汎ニシテ活発ナル大東亜的仏教運動ヲ展開シ、以テ建設大東亜共栄圏ノ精神的基礎ヲ確立スルタメ中国仏教青年僧侶ヲ育成教化シ、仏教徒ノ東亜的一大組織ヲ確立セントス⁴⁶⁾

とある。どちらの資料にも具体的な日付が記録されており、南京仏学院の設立が構想されてから、きわめて短期間のうちに、急ピッチで開学の準備が進められていったことがわかる。便宜上、これを年表にまとめる。以下のようになる。

中支大同仏教連盟の発足以降、南京仏学院の開設が加速するなか、貫式は興亜留学生としてその開設準備の渦中に身を投じたことになる。

そして、「小川貫式資料」には含まれていないが、その開学までに至る現場の生々しい状況を伝えるのが、第一章でも引用した、『南京青年』第二号に掲載された横湯の一文である。改めて以下に全文を引用する。

図表：南京仏学院年表

昭和14年(1939) 2月27日	中支宗教大同連盟の結成記念式典が上海で執り行われる
同年 3月 1日	中支宗教大同連盟から南京仏学院の開設許可を受ける
同年 4月	日華仏教連盟南京総会が結成される 南京仏学院が連盟の文化事業の一つに位置付けられる 連盟より委嘱されて南京西本願寺が院の経営を担当する
同年 5月16日	南京特務機関に南京仏学院開設の出願をする
同年 6月 1日	南京古林寺の境内に南京仏学院の仮院舎を創設する 特務機関の援助を受けつつ学生を募集する 募集対象は十四歳以上二十五歳以下の優良青年とする
同年 6月23日	南京特務機関長より南京仏学院開設の認可が下りる
同年 7月 1日	南京仏学院の開学典礼が行われる
同年 7月 5日	南京仏学院で授業が開始される
同年 8月 1日	尼僧の養成機関として仏学院の分院も創設される
同年12月	『南京仏学院概況報告』が出される
昭和15年(1940) 6月27日	第1回の卒業典礼が行われる

「大和」——中国青年僧と伍して—— 横湯通之

西本願寺が日華仏教連盟から委嘱されて経営中の南京仏学院の成績について、教育、社会、宗教の方面の御参考に供しませう。

私が本願寺本部から南京へ赴任するときに命ぜられた事業の一つが仏学院でした。僅な経験を土台にとりかゝつて見ると容易ならぬものでありました。今、南京青年会々員である小川貫式君が京都の龍谷大学史学研究所を出てすぐかけつけて呉れたので、古林寺に放戒（中国僧尼の授戒会）が始まつたのを幸ひに彼等の寺廟生活調査傍々宿り込みで学院開設は可能か何か研究してもらつたのです。四月の下旬にこの種のもの純然たる宗教運動であるとして内政部に所属することに決定、五月の下旬、放戒が終ると早速、学生募集をやつたのですが、放戒の連中から選んで見てはといふ住持の話もあり試みに中国初等科に在籍したと称するもの二十三名の口頭試問をして見ますと、この中で完全に初等科を終つたものが二名、あとは二、三年で中途退学した者ばかりです、大体次ぎのやうなことを訊いて見ました。

- 一、君が僧侶になる動機は何か
- 二、僧侶になつてどうする考へか

三、事変に対する中国僧としての責任

第一の答は病身、貧困、無学（一般常識が欠けてゐること）であることになつてしまひました。従つて第二の答は過劇な労働をしなくても好い、度牒（僧侶の免状）があれば食ひ外れがなく、どこの寺へ行つても宿られる、学問がある位なら僧侶などにならないといふのです、第三はどれもこれも国民政府が寺廟を圧迫した（兵營にしたとか、田祖もくれず米麦の収穫もなかつたとか）ので今度は大いに改善して貰ふやうにしたいと口を揃へて申しました、従前の彼等は遊墮であり貪慾であり暴戻であつたのです、故に現在蒋介石が連れて行つてゐる大虚及びその一派の革新組が中国仏教会の一团を中心として相当に中国の僧侶と居士に対する改造策を強制してゐたのです、とに角どうかと思ふ連中を十名ほど、とつて見た後特務機関を煩はして管内の寺院からも選ぶといふ方法もやつたりした挙句六月に許可を得七月一日に古林寺で開院式をいたしました。十三名の学生が来たわけです

小川君が教務主任として彼等と同居し、監督と指導を受けもち、仁性といふ東京の大正大学にゐたことがある人を助手に、中国僧の二三を講師に依頼してポツポツ始めたのですが、仲々思ふやうにゆきません。

第一、中国語を習得しない日本人が教育する点の至難事

第二、中国と日本寺院及中国の学院と日本の学院との組織や規定の相違してゐる事

第三、風習を重ずる彼等を知るまでの苦しかった事

第四、日本僧に対する信頼がどの程度か別らぬ事

等、よく筆舌の尽しえぬ幾日かを経て、九月に入ると学生も先生も病氣続出といふ有様です。伝染性のものだといふので、自働車で運んだり、何日退院出来るか判らぬのが出来たり、日本へ留学することを楽しみに食ひ慣れぬ肉食をした、めに腹をこはしたり、マラリヤ熱患者が出たり、とうとう二週間余の休業をしなければならなくなつたりしました。

上海の西本願寺総監部からは一時、小川君たちを日本に帰して静養させたらどうかといふて来るし大事な諸君を死なせてはならず、やりかけた今、中止してはこれだけのものが集るかが疑問だし全く夢中になつてやりくりして十一月に入るといくらか態勢がよくなつて来ましたが、それに龜谷法城君が教へる音楽や童謡舞踊などが大変学生の興味をひいて少しづつ、やつてゐた日本語が使用に堪へるやうになつて来だしたのと厨子があなくなつて暫く自炊生活をやらせて見るとこれが学生の共同生活感を刺戟したりして、前途が明るくなつたやうです。

大陸新報社の海軍旗の献納式があつた時、參觀に連れだした市中の往復で、市民から浴せられた罵倒の言が相当に痛かつた

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(三)

と見えます。僧服を新調して着せやうとしますと『何卒、^{マダ}整服を着せてほしい』と願ひ出る有様、会計の都合もあるんですが、思ひつきでやることに決定、十一月二十九日に全部、教員養成所の学生服に準じたものと正帽とを与へました。この時の感激は何ともいひやうがありませんでした。初めてきる整服、冠る正帽学院の硝子にうつして姿勢を直してゐる彼等を見たときには思はずあつたものがこみ上げた次第です、これが動機になつたものか順に彼等の動きが活潑となり、今までの陰鬱さが失くなり誠に気もちのよい暮を迎へたわけです、二朗廟の金陵刻經処にある楊仁山先生のお墓の掃除をさせたり夫子廟に日本文化写真展を観せたりしましても僧服ではほんとうに気の毒であつたやうです、かうして見学に歩く度び、市民からかけられるいろいろ罵言が可なり彼等を臆病にもさせましたでせうし発奮もさせたのでせう

今、本願寺からは校旗一流を調制して贈ると知らせがありました。どの程度に變つてゆくか何とも申されませんが、すでに十四五名の新入学希望者が出来、新学年までは駄目だと断つてゐる状態です。拙らぬデマの裡で暮してゐる彼等に、さやうなデマに乗ぜられぬ様、訓へてはゐますが、仲々油断は能きませぬ

私は中国語も知らず、中国の民情も研究したこともない者で

す。たゞ今日までの経験から申しますと何でも好い与へることに腐心すべきでないかと思ひます。彼等から何かを獲やうとすることは今のところ無理なやうに考へます。何を与へても功利的でないやうによく彼等の求むるものとその理由をたゞしてやるべきです。病身と無学と貧困とを以て僧侶になる資格の如く考へてゐた彼等から奪ふべき何ものがあるでせうか？私は六ヶ月の普通科終了後、この一月十五日から始まる高等科の教材を選定中ですがこの六ヶ月も前とおなじ何ものをも求めず静かに彼等の希望を聴いてやらうと思つてゐます、やはり長老だの法師だのといふ世慣れたものと違つて青年僧には青年らしいものがあることを知ることが能きます。段々よい僧侶も戦禍で生き残つてゐて出て来ます、その行業に於てその学殖の点で日本の仏敎界にて見られぬ尊いものを把んでゐる僧侶もゐるわけですから、私は辛抱よくその人たちが私たちと握手をしに来るのを待つてゐます

仏学院の野心は、はるかに遠いところにあります。学生の本留学、帰朝後の活動。か様なこともその一つでしやうが『大和』の実現に自発的に乗り出して呉れることを最終の目的として、中国社会の一番下層と見做されてゐるらしい僧侶の朋友になりさるだけが現在の心構へであります。

維新政府、市政府の要人連は全部仏敎徒であると云つても差

し支へありません牢として抜くべからざる信仰及その行義の転用を考へずにはゐられません日本の為政者や夫々の機関の方々がこの簡単なそして純な微妙の心機に関心をもつてよき日本仏敎徒を大陸に送つて話をさせるとかして下さるならば私共の仕事も更に一段と拍車が懸けられやうかと思ひます。

私は何も印度に起つた仏敎によつて東洋の文化がどれだけ発展してゐたかといふことを考へよだの今度は日本仏敎の逆輸入をするのだなどと馬鹿氣た法螺も吹きません人間の救ひと国家社会の淨穉を大乘的仏敎に基調して立つた日本仏敎と小乗仏敎の形骸と殘滓を拜んでゐるかの如き中国僧侶の守旧仏敎とは自ら交錯するまでに相当の時間をもたなければなりませんまい。基敎によつて一躍宗敎的社会事業の部門を敎へられた中国民衆と訓話研究と形式のみの中国僧侶との間に介在して国家を基調とする日本の大乘敎的交歓をまづさきに行はねばなりません、日本のやうに大乘仏敎の信仰を發露遊ばされた聖徳太子さまの実踐された仏敎的社会事業の訓練があつて西洋流の社会事業が注入されたのであれば何も欧米依存の何のといふ大さわざをしなくて好いのぢやないかと考へます。残念ながら中国の仏敎徒、殊に僧侶はこの点、社会からとり殘された泥人形ですこれから紅かねつけて着物を与へ飾り窓まで持つてゆけるやうにするのには泥土の下地を作り訂すか、またはそのまゝに白亜の粉をと

きつけてやるかしなければならぬでせう

大体に於て俗人仏教徒の勢力が中国の思想界を風靡してゐます。故にこれらの居士たちをして日本仏教界の動きに興味をもたしめなくてはなりません。故に日本の仏教徒が卑しめられたり、日本の僧侶が貶せられてゐるやうなことの無いやうにしなければならぬと思ひます。そこに技術が要るかと思はれますけれども今の私にはさやうな一方的なことは判りません。

たゞ、今の泥人形そのまゝに白粉つけて紅つけて飾つたのは碌なものならぬと信じます、ほんとうに今の形ちを改めさせてゆくには、丁度日本の仏教が大乗化させられたのは『大和』の国柄であつたればこそ、その『大和』のために進み出た日本仏教が重視せられ認識されると中国僧侶も亦心機一転の覚醒がならうかと存じます。事に事変は第二段階に入つたと申します。ゆるがぬ大武力に裏づけられた思想『大和』の活力素は、中国に於て果して何から求むべきでせうか？

私はこれからの六ヶ月を興味をもつて勉強いたします
冬季休業が終つて学生はそろそろ帰つて来ました。中に一名某地点で抗日軍に捕へられたと某僧から通知がありました。元気で南京駅を出発した日の顔がありありと思ひ浮びます。どうか無事であつてくれよと念じてゐます⁴⁷

※句読点はすべて原文に準じる

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(三三)

このように、現場はトラブル続きで、苦難を乗り越えての開学であつたことがよくわかる。それにしても、目を引くのは学生たちの様子で、横湯自身、「遊惰であり貪欲であり暴戻であつた」と述べているように、若き中国青年たちの、生きることに貪欲で、あまりにも無邪気な様子には正直、驚かされる。むろん、これは開教を推進する日本側の見方にすぎないものなのかもしれないが、横湯の説明によると、こうした学生たちの貪欲な態度は、中国社会のなかで僧侶が最下層に位置づけられてきたことに由来しているのだという。

また、日中戦争下の日中文化交流について考察するとき、常に意識せざるをえないことは、交流そのものが宣撫工作の手段である以上、それは表層的なものにすぎず、占領下に置かれた中国の人々には捨てきれない抗日感情があり、結局はそれが障壁となつて、日中戦争下では真の文化交流はついぞなしえなかつたのではないか、という点である。事実、横湯も右の文章において、学生が抗日軍に拉致されたことや、「デマ」に悩む学生たちのことなどに触れている。ところが、ここで語られた内容をみると、開学に向けて障壁となつた事柄は、若い青年たち相手ということもあつて、横湯の挙げた言語や風習、信頼関係といったもの以上に、もっと現実的な問題、すなわち、ドタバタとした学生たちとの日常のやりとりのなかにあつたのであり、また、そのドタバタとしたやりとりを交わすうちに、教員たちの間には青年たちに対する暖かな感情が生まれてきたことも、横湯の文章からは感じ取れるように思う。いずれに

せよ、貫式たちはこうした苦勞を重ねて、南京仏学院の開学にこぎつけたのである。⁽⁴⁸⁾

ところで、この横湯の文章からもうひとつ想起されることがある。それは貫式が記した、「南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興」という一文である。日本と中国の双方の新聞に記事として連載されたのち、一枚の寺院縁起のような形で再版されており、如馨古心（一五四〇〜一六一五）によって創建されて以降、現代に至るまでの古林寺の歴史を簡潔に綴った内容となっている。注目されるのは、「古林律寺」ともしばしば呼称されてきたように、古林寺は戒律専門の寺として、戒壇で授戒を厳肅に行ってきた特異な寺院であることが強調されている点で、しかも、仏光が三昼夜、その戒壇を照らしたという靈瑞ゆえ、「天下第一戒壇」として知られるようになった、ということも紹介されている。やや長文となるが、以下、全文を引用しておく。

南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興

南京仏学院 小川貫式

南京の城内にある馬鞍山には落葉樹林でつまれた鳳山古林律寺がある。こゝは山西路に近く附近に官舎住宅街を控へてゐるので新緑の森に杜鵑の啼く初夏や全山黄いばみ落つる紅葉の季節には遊士の多いことは南京第一である。

この寺は六朝の昔にさかのぼるほどそんなに古い廟ではないが、それでも三百五十年前明の神宗萬曆年間の開創である。この寺が有名なのは春秋の景色のよいことばかりではない。近世の戒律を中興した宝華山隆昌寺の三昧寂光律師の師にあたる慧雲律師如馨古心がこの地に古林庵を結び戒壇を築いて今日の隆盛の基をひらいたからである。如馨古心は仏弟子の中で持戒第一のほまれがあつた優婆離尊者の再来と慕はれ、この戒壇に登り授戒をしたときには五色の雲が殿壇を照し三昼夜も続いて夜もなほ昼の如く明るかつたと伝へられる。感壇放光の靈瑞は北京の戒台寺、杭州の昭慶寺、宝華山などの戒壇に於てもみたくとであるが、仏光が三昼夜照耀したのはこの古林戒壇のみであるところから古くより南京江寧古林寺天下第一戒壇の称がある。萬曆四十一年には神宗皇帝の江南古林庵古心律師に紫衣をたまひ、振古香林の寺額、萬壽戒壇の扁額、勅絵壇儀その他千仏珠衣盃盂錫杖などを下賜されたのである。翌年には帝が律師を山西五台山に迎へ大護国聖光永明禪寺を勅建し皇壇をきづき千仏の大戒を授けしめた。この時の靈感によつて神宗皇帝は律師をこゝに留めんとしたが、師は固辞して江南に帰りまもなく遷化したのである。

この慧雲律師如馨古心には十二名の有名な弟子があり、天下各地の古山名刹に住し師の戒律復興の精神を世に弘通したので

あつた。この古林寺をついだのは隱微律師と隱含璞律師の二人であつた。同門の三昧寂光律師は揚州石塔寺から龍潭の宝華寺隆昌寺に住し慧雲律師の遺した戒律復興の偉業を大成したのである。清朝以後の中国授戒の儀礼や行事百般はみな三昧律師の制定するところといはれ宝華山ひとり近世戒律の総本山のたちで栄え來つた。然し近世律門の祖庭である古林律寺も現世に至るまで幾變遷を重ねつつ長き伝統を保つて今日の隆盛を呈してゐるのである。

古林律寺は今までに三度の災禍にかかつてゐる。第一回は清の康熙二十三年の春である。この時には戒台と丈屋だけ焼残り、住持寂鼎が復興につとめ三ヶ年の後に前殿後宇の再建をなし、田畑を寺領として香積の供にそなへることとしたのである。第二回の禍難は太平天国の乱に長髮賊がこの南京に入城したときである。昌心は師の虚舟に従つて寺莊のある田舎へ避難し、同治三年官軍の金陵奪還をさくや古林寺に帰り兵燹にかゝつた寺門の再興に着手し、数年の間に殿宇堂室の規制が悉く備へるこゝとなつた。この復興者昌心は光緒十二年に没したが、其後十余年ならずして又々災厄を蒙つたのである。それは光緒二十六年九月八日、裏山にある火薬庫の爆発によつてである。仏殿、東西兩廊、藏經樓閣はもとより東山能高の築いた戒台、庁室山門までも烏有に帰してしまつた。爆薬の轟音とともに石は裂け

磚は飛散し僧衆の死傷する者多く実に目もあてられぬ有様であつた。

時に輔仁友師は劉督部忠誠公の力によつて復興資金の下附をうけ日夜不眠不休で殿堂の再興に尽力し三年ならずして今日ある大雄宝殿に仏の尊容を安置することが出来た。現存の仏殿をはじめ戒壇、東西兩寮、藏經樓、祖師堂、方丈、庫厨、山門などみな輔仁の再建にかゝるものである。今、大殿にかゝける四字の大額は輔仁友師の筆になり、法堂などにかける師八十秩の祝額は道俗知人より贈つた師徳を讃へたものである今事変にも殆ど被害もなく古林律寺は南京屈指の大刹として隆盛を呈してゐる。

この寺がこの首都南京にあつて他の寺廟と違ひその特異性を保つのは戒律専門の寺として戒壇をもつて毎年春秋兩季に嚴肅な授戒の儀式いはゆる放戒が昔ながらに実施されてゐることである。

放戒とは仏教に帰依信仰する者が三師と七尊証師の前で教団のもつ仏教徒としてこのおきてを誓約する尊嚴な儀礼である。元來仏教の入団法としては得度と受戒の二式があつた。前者は生家を捨てて剃髪し寺に入ること、國家の許可を必要としたが、清朝以來この管理制度はすたれてしまつた。これは度牒制を廢止したまでで、出家者がなくなつた訳でなく寧ろ自由にな

つて増加をみたのである。受戒については教団内部の儀礼として古来変わらず行はれて来たが時に消長があつた。

明萬曆年間に如馨古心律師がこの古林寺をひらいた頃は、唐代に開宗をみた道宣律師の南山律宗も全く衰へ、加ふるに出家入団の國家管理もすたれ、寺院の僧尼は玉石混淆して日常生活の秩序を失ふばかりであつた。古心律師の戒律復興はかゝる教団内部より現はれた自覺に基くものであつた。法嗣の三昧寂光が放戒の儀礼を制度化し、法孫の見月律師が「毘尼止持」「毘尼作持」「毘尼闕要」などを製文した頃には清朝の國家管理による出家入寺の度牒制が全く廢れて教団の自治と自肅の必要にせまられたときであつたのである。近世の放戒は古来の得度と受戒の両面を兼備したものとしてこれを行ふ戒壇のもつ社会的意義は往古に倍したといふべきである。

戒壇は出家得度した沙弥僧のために具足戒を授けるとき戒場に土を封じて造つた壇である。唐道宣律師が南山律宗を開き戒壇図經を制定した頃より永久施設の石戒壇が一般に行はれ、今ある古林寺の戒壇も亦石造のものである。古林寺の戒壇は我國の奈良朝にあつた天下の三戒壇や現存する唐招提寺の戒壇と同一戒壇の図經に法るもので、叡山に伝はる最澄の円頓戒壇とは教義の内容性質を異にするものである。中国にも古来大乘戒壇、小乘戒壇の別があつたが、古林寺の石戒壇は後者に属すべきも

のである。現在中国仏敎界で著名な戒壇は五台山、北京、宝華山、杭州及び南京である。古心律師の築壇の靈瑞により天下第一戒壇の名をもつて知られる新中国の首都南京鳳山古林律寺の戒壇が、今時内政部長陳羣居士によつて復飾をみたことは令法久住の事である。護法の徳報の甚大なもの、あることを信じて疑はないものである。加ふるに前外交部長（現駐日大使）褚民誼居士がその名筆を「天下第一戒壇」と揮つた大額奉納のことも亦有縁至極の慶事と称すべきである。

顧るに中世の國家に於ては宗教行政に関しても、近世程に寺觀教団の自治を認めてゐた訳でなかつた。否等閑に付することはなかつたのである。今や新しき秩序をととのへつつある新中国國家に於ても宗教行政の上でも昨日までの態度では許されな
いものがある。為政者はよろしく國家的な立場よりその保護と指導を与へ教団人は将来へ進展する現在の正しき意義を理解し
新中国の宗教を創造しなければならぬ。

今時陳内政部長の古林律寺の戒壇復興の盛事も新しい中国仏敎の發展への一契機をなすものとして意義付けなくてはならぬと信ずる。^⑩

これらの内容のうち、特に興味深いのは以下の五点である。第一に、古林寺には開創者である如馨古心の靈瑞をもつて權威づけられた、「天下

第一戒壇」があるという点で、それゆえ戒律専門の寺として他の寺院とは区別される特異な寺院である、と強調されている。第二に、一つめの点と大きく関わるが、古林寺の戒壇では、年に二回、放戒という授戒行事が厳粛に行われている点で、この放戒は南京占領後も途絶することなく行われていたこともここからはわかる。第三に、清朝に度牒制が廃止され、国家の統制管理を受けなくなったため、戒壇で授戒を行ってきた古林寺は、近世以降、教団を自治的に運営できるようになったという点で、貫式も指摘しているように、僧侶になるには本来、国家の許可が必要であったが、それが要らなくなったことで僧侶の自由な輩出が可能になり、ひいては教団の自治的運営も可能になったということがわかる。第四に、古林寺は過去三度の罹災を経験しているという点で、壊滅的であったのは光緒二十六年（一九〇〇）の裏山の火薬庫爆発の時で、それに対して、日本軍の南京侵攻時にはほとんど被害はなかったとされている。第五に、褚民誼や陳羣といった南京国民政府の要人たちが、居士として古林寺の戒壇復興に大きく寄与している点で、汪兆銘政権の外交部長をつとめた褚民誼が揮毫した「天下第一戒壇」という大額が古林寺にはあったことや、同じく汪政権で内政部長をつとめた陳羣が、火薬庫爆発により破壊された戒壇を復興したことが述べられている。

一見、古林寺の歴史を通覧しただけのような内容であるが、ここには学者としての貫式なりの、開教事業への貢献が示されているように思う。なぜなら、戒壇とは、授戒によって僧侶を輩出するための場であり、し

かも古林寺の戒壇は「天下第一戒壇」と評された特別なもので、それゆえ、清代の度牒廃止以降は、古林寺の自治も大いに助長されたが、その戒壇を擁する古林寺に、新たに日本式の僧侶を輩出するための機関である南京仏学院が開設されているからである。おそらくこれは偶然ではない。南京仏学院が開設されるにあたって、戒律の寺としての古林寺の歴史的なブランドが再評価されたのだと言い換えてもよい。事実、褚民誼や陳羣がこの戒壇の復興にひとかたならぬ尽力をしているし、先に引用した横湯も、当初、仏学院の学生を募集するにあたり、まずは放戒の連中から選ぶことを試みた、というエピソードを明かしている。新しい中国の宗教を創造するためには、昨日までの自由な態度を捨てて、国家によって統制されるべき必要があると、貫式は同文の最後に説いているが、中国仏教史を専門とした学者でもあった貫式にとつての開教とは、古林寺の例にみるように、中国仏教の歴史を踏まえたいうで、そこに日本の仏教を習ね合わせ、その先に新たな宗教を創造していくことだったのではないだろうか。横湯が先の文章において、「小川貫式君」（中略）

「学院開設は可能か付うか研究してもらつた」という文言が改めて思い出される。この貫式による「南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興」は、中国のかつての首都であり、新政府のお膝元ともなった南京にあつて、本願寺派によって創設された南京仏学院が宣撫工作のための重要機関であったことを、別の角度から示す重要な資料ではないか、と考えている。

昭和十六年（一九四一）四月、貫式は北支地域で学術調査を敢行するため、南京仏学院での職を辞して北京へと向かう。ある私信には、日本に戻ったときのため、やはり研究はしておかなければならぬとの決意が綴られており、その言葉どおり、同年七月には山西省へと入り、各地の仏教史跡を踏査しつつ、五台山や太原崇善寺で学術調査を行い、一定の成果を上げている⁵⁰。そして、それとともに、貫式の資料からは南京仏学院関係のものは姿を消し、翌年三月には、龍谷大学からの招請がきっかけとなって貫式は日本に帰国することとなる。ただし、帰国後も南京仏学院の学生たちとの交流は続いていたのだという⁵¹。むろん、これは後日談にすぎないかもしれないが、南京での二年間、貫式が講師としていかに血を注いで若き学生たちと向き合っていたかがうかがえるのである。

おわりに

三年間、「小川貫式資料」と向き合ってみて改めて思うことは、貫式の残した資料はどれも、中国に留学していた頃の、貫式個人の私的な時間をそのまま紙媒体に変えたような、そんな印象を受けるものだということである。はたしてそこに史料性が見出せるのかどうか、疑問がないわけではない。

ただし、見方を変えれば、貫式の資料は、開教事業に携わりつつも、あくまでも学者の残したものであり、南京関係の資料からは研究と開教

の接点が見えてくる面白さがある。たとえば、「日華仏教連盟結成総会」のプログラムの裏に、棲霞山での大蔵経残欠発見の経緯がサラサラと書きつけられている。これが貫式の南京における日常だったのである。

では、そうした面白さを歴史的な観点からどう読み解くのか。本稿では、そのひとつの試みとして、南京仏学院に着目してみた。むろん、貫式が南京仏学院について残したものは、入学式・卒業式の招待状に、若干の写真と学生への手紙、そして仏学院の置かれた古林寺についての沿革書、それぐらいのもので、そこには公的のものは一切含まれていない。極めてプライベートな記憶の集積。そう呼ぶべきものであるかもしれない。しかし、南京仏学院が宣撫工作の機関である以上、当時の公的な文書には大仰な理想ばかりが踊る。それに対して、貫式の残した資料は、その現場に身を置いた者の、いわば「等身大の史料」であり、事実、そこからは学者として問題に真摯に向き合っていた貫式の姿が浮かびあがってくる。それを史料としてどう活かしていくのか。それを考察していくことが、本研究の最終的な目標である。

注

- (1) 大蔵会編『大蔵会―成立と変遷』（百華苑、昭和三十九年十一月）。大蔵会は大正四年（一九一五）、大正天皇の即位式を記念して始まったもので、大蔵経をはじめ、仏教に関する典籍を展覧する仏教行事である。本書はその第五十回開催を記念して発行されたもので、その執筆を貫式は担当している。
- (2) 藤井由紀子「五台山六月大会の復興と日中戦争―「小川貫式資料」

- (9) みる五台山」〔西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(二)〕所収、『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十五号、平成二十九年三月)。藤井由紀子・小川徳水「山西省玄中寺の復興と「小笠原宣秀資料」について」〔小川貫式資料〕の史料性をめぐって(〔西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(二)〕所収、『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年十二月)。
- (3) 小川貫式「仏教史学を志して」(西巖寺蔵「小川貫式資料」、昭和五十一年)。
- (4) スクラップブックに貼付された貫式筆の未投函絵葉書によると、四月六日に神戸港を出帆し、八日には上海に着く予定だとあるほか、本山が二等室を予約してくれたため、快適な船旅であったことなども記されている。
- (5) 海外開教要覧刊行委員会『海外開教要覧 海外寺院開教使名簿』(海外開教要覧刊行委員会、昭和四十九年三月)。
- (6) 横湯と南京布教の関わりは深く、南京攻略戦にも横湯は従軍布教使として参加していたという。また、西本願寺第二十三代宗主の勝如も、南京占領直後に南京入りして、日本軍の慰問を行ったという(浄土真宗本願寺派国際部・浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『浄土真宗本願寺派 アジア開教』、本願寺出版社、平成二十年三月)。本願寺派の南京出張所は、南京占領の翌年にあたる昭和十三年(一九三八)、太平路白菜園に開設されたが、その後、在留日本人の増加をうけて中山東路上乗巷に移転、昭和十七年(一九四二)には別院に昇格している(註6前掲書)。
- (8) 昭和十三年(一九三八)十一月、第一次近衛文麿内閣は、日本の中国進出に対する国際的非難をかわすべく「東重新秩序」声明を出したが、その内容は日本と提携する新興政権を中国に樹立し、東亜和平を築いていくというものであった。
- (9) 貫式の所属した本願寺派の場合には、大谷光瑞が、親鸞の念仏を護国の念仏として再解釈した「御消息」を出すなどして、興亜促進運動を展開している。(『戦時教学』研究会編『戦時教学と真宗』第一巻、永田文昌堂、昭和六十三年七月)。
- (10) 貫式による南京関係の自筆原稿の大半は天真堂製であることから、この調査計画も南京入り後に記されたものと考えられる。
- (11) 小川貫式「研究題目 東亜近代仏教の歴史的研究」(西巖寺蔵「小川貫式資料」、記載年不明、昭和十四年頃か)。
- (12) 「中支宗教工作要領」を含む「民衆指導工作諸規定」については、松谷新野、両氏の論考に詳しい。松谷氏によると、昭和十三年(一九三八)十月、中支那派遣軍の特務部(上海特務部)を統括していた原田熊吉が、中国民衆工作に関する諸政策案を「民衆指導工作諸規定」として取りまとめたなかに「中支宗教工作要領」というものがあり、そこでは中国の諸宗教を通して民心を安定把握し親日誘導することや、弊害を避けるため諸宗教進出は国策に順応して統制ある形で行わせることなどが規定され、統括的に宗教工作を推進する機関として中支宗教大同連盟の発足が改めて提議された形となったという。なお、「民衆指導工作諸規定」は上海特務部と南京特務機関によって立案された、思想・宗教・教育・社会事業などに関する諸政策を包括したもので、昭和十三年十一月十八日付で陸軍省宛てに送付されたという(松谷暉介「日中戦争期における中国占領地域に対する日本の宗教政策―中支宗教大同連盟をめぐる諸問題―」、『社会システム研究』第二十六号、平成二十五年三月)。また、新野氏の論考では、「民衆指導工作諸規定」の概要が詳述されており、「中支宗教工作要領」のほか、「中支教化・社会事業要領」「中支思想対策要領」の趣旨、および内容が、当時の宣撫工作の趨勢と絡めつつ、具体的に論じられている(新野和暢『皇道仏教と大陸布教―十五年戦争期の宗教と国家―』、社会評論社、平成二十六年二月)。
- (13) 文部省同協議会の席上で菅野中佐は「我われは今後この欧米依存の宗教を東亜協同体の建設という国策の線に転向せしむることを絶対的必要と考える」と述べ、同連盟の目的が「欧米依存の宗教」を転向させることにあることをそこでも強調していたという(註12松谷氏論文)。
- (14) 中支宗教大同連の総裁は近衛文麿、副総裁には大谷光瑞を推戴し、神道部長には畑一、仏教部長には福田蘭正、基督教部長には小林誠

が就いたが、各部の部長の互選で立てられた理事長にも小林誠が就任して、連盟全体を統轄したという。また、小笠原のほか、仏教部の委員としては欠畑文雄（浄土宗）、成田芳髓（曹洞宗）、神道部の委員としては、倉井満弘（金光教）、増田孝則（天理教）、キリスト教部の委員としては、島津岬（組合教会・上海YMCA）、中澤豊兵衛（日本基督教会）、前田彦一（日本組合教会）が加わっていたという（註12松谷氏論文）。

(15) 『日華仏教連盟結成総会並大会秩序表』（西巖寺蔵「小川貫式資料」、印刷年不明、昭和十四年四月か）。

(16) 日本の仏教教団が中国開教に苦戦するなか、相互に助け合いながら教勢を拡大するために組織された団体だったとみられる（中川剛「新出の西巖寺蔵「小川貫式資料」について」、西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告（一）」所収、『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十五号、平成二十九年三月）。

(17) 註12松谷氏論文。

(18) 横湯通之「大和」―中国青年僧と伍して―（『南京青年』第二号、昭和十五年二月）。

(19) 管見によるかぎり、『中外日報』などには、貫式の調査報告は掲載されていない。「小川貫式資料」中には、書きかけで完成されていないが、「現代支那に於ける仏教活動」と題された草稿もある。ただし、その内容は居士仏教に関するものばかりで、先の調査項目とは一致しない。

(20) 貫式と同時期、西本願寺の興亜留学生として北支に派遣された新野修基が、後に杭州へと移った際、「西本願寺」かつ「興亜院囑託」として、杭州地域の仏教の実態調査を行っている。その内容の抄略が『中外日報』に掲載されており、仏教の特徴、寺院の形態、民衆の信仰、これらに至る歴史的経緯が簡潔に記されていて、学者としての知見に基づいた精度の高い調査が行われたことが類推できる（新野修基「杭州における仏教の現況」、『中外日報』第一二四四二号、昭和十六年二月十三日）。

(21) 本願寺派が中国に留学生を派遣すること自体は、明治時代以降、開

教使の派遣とともにずっと行われてきている。昭和に入ってからでは、満州への北支留学生（満州国留学生）の例があり、彼らの派遣に向けて、昭和十二年（一九三七）には満州に日語学校を、龍谷大学内には満州語学院をも開設している。

(22) 註20を参照のこと。

(23) 日中戦争下に派遣された興亜留学生は、制度として整えられていたものではなく、近代以降の海外派遣の流れに、「東亜新秩序」声明以降、盛り上がりがあったといった興亜という時代機運が重なって、「興亜留学生」と呼称されることになったとみられる。ちなみに、当時、貫式が使用していた名刺には「留学生」とのみ印刷されている（西巖寺蔵「小川貫式資料」のうち「山西省アルバム」貼付資料、作成年不明、昭和十六年頃か）。

(24) 註2藤井前者論文。

(25) 『東洋史苑』小川貫式先生追悼号掲載の著作目録と照らしあわせる限り、当該目録には見られない内容のものも草稿類には含まれている（猪飼祥夫編「小川貫式先生略年譜・著作目録」、『東洋史苑』第七十七号一合併号、平成二十年三月）。

(26) 小川貫式「大明南蔵始末攷」（西巖寺蔵「小川貫式資料」、記載年不明、昭和十五年頃か）

(27) 小川貫式「棲霞山の大明南蔵仏典」（西巖寺蔵「小川貫式資料」、記載年不明、昭和十五年頃か）。これもまた日華仏教連盟プリントの裏に書きつけられたメモ書きである。全文は以下の通り。「棲霞山の大明南蔵仏典／棲霞山といふ名を覚えたのは、印度に興つた一宗教であつた仏教が／東亜の文化の発展する史上に覆ふことのできない重大な役割を演じて、単に印度の仏教ではなくて、東亜の宗教として君臨してゐる事を知り、この仏教文化に非常な興味と感心を持ち始めた頃である。／それはこの棲霞山が歴史上には、我國の比叡山によく似てゐるから／であつた。仏教は前後千数百年の間にわたり或は半島から／或は大陸より直接に伝来したが、なかでも奈良朝の三論宗、／平安朝の天台宗、および鎌倉時代の禪宗などは揚子江の流域／いはゆる江南の發達した仏教各宗である。而もこれ等のど

れもが／直接に、或は間接にこの棲霞山にあつた仏教を母胎として六朝より唐宋にかけて展開し分岐したのであつたのである。／こんなところが我国の比叡山がその昔浄土宗の源空、禪宗の／栄西、道元、浄土真宗の親鸞、法華宗の日蓮等の大徳を輩出して／あるのに似てゐるのである。加えこれらの日本仏教の母胎となつた比叡山延暦寺の天台教学は更に遡つてその源泉をた／づねるときはすべてこの棲霞山に帰一するといつてもよい。／それは陳隋の世に三論宗を開いた嘉祥大師吉藏も浙東の天台／山にいりて天台宗を創めた智者大師智顛もともにこの棲霞山／に住んで印度の龍樹提婆の説いた空の哲学を研鑽して遂に一宗の／教学の体系を認識したからである。こうした観点から永く私の／憧憬のまゝであつたのである。／これは単なる文化史の上からは確に重視すべき研究の対象である／が、この研究が残されてゐることはいふまでもない。／先年等々、この南京に居留すること、なりてこの棲霞山にもゆく機会／が多く、其都度何か新しい関心を生じて興味の尽きることがない。／今般、中日文化協会の機関誌の編輯者のもとにより何か棲霞山／の感想、隨筆をとのことであつた。現地のこと、とりたてて、研究も進んでゐないが、／たゞ昨年棲霞山で発見した大明南蔵のことをまとめてせめを□□□□次第である。／そのまづしい稿を御清覧に供し是正と御指導を賜はらば幸甚の至である。」

(28) 汪兆銘による南京国民政府樹立後、中華民國二十九年（一九四〇）七月二十八日に南京で設立された組織が中日文化協会で、東亜新秩序を文化面から支えるべく、日中文化の交流を図り、新東亜に相応しい東洋文化を創造し、世界に發揚することを目的としていたという。以上は、「中日文化協会記事」（『中日文化』日文版創刊号、中華文化協会出版組、中華民國三十年三月）、傳式説「中日文化協会と日華文化工作」（同創刊号）。また、南京の中日文化協会を論じたものに、杉野元子「南京文化協会と張資平」（『藝文研究』第八十七号、平成十六年十二月）がある。

(29) 小川貫式「棲霞の懐古」（『中日文化』日文版創刊号、中華民國三十

年三月）。

(30) 小川貫式「南京青年會叢書（第一輯）六朝の勝地 千仏の名藍 棲霞山史蹟」（南京青年會、昭和十五年七月）。

(31) 「小川貫式資料」のうち、「現代支那に於ける仏教活動」と題されたものは、原稿用紙百枚ほどの未完成の草稿であるが、その内容をみると、清朝初期から近代に至るまでの居士の変遷を明らかにし、中国ではなぜ居士仏教が台頭するに至つたか、その原因を歴史的に解明しようとする主旨で準備されたものようである（小川貫式「現代支那に於ける仏教活動」、西巖寺蔵「小川貫式資料」、記載年不明）。

(32) 小川貫式「居士仏教の倫理的性格」（『龍谷史壇』第三十五号、昭和二十六年七月）、同「中国における居士仏教と倫理」（『日本宗教年報』第二十七号、昭和三十六年）。

(33) 本稿で取り上げた四冊のアルバム、スクラップブックについて、本論では南京関係のものとして紹介しているが、このうち二冊については、途中、北京別院での写真や、昭和十六年（一九四一）四月に北京天安门広場で行われた釈迦牟尼仏聖誕連合慶祝大会のプログラムなども貼付されている。

(34) 二〇一八年度以降、科学研究費の助成事業に採択されたことで、「小川貫式資料」については、今後、アルバム等に貼付された写真一枚一枚も含めて、すべて画像つきのデータベースとして公開していくことを予定している。そのため撮影作業を現在進めているが、最終的には他の写真資料等とつきあわせながら、写真の内容を正確に特定していきたい、と考えている。

(35) 南京仏学院の開学典禮（開院式・入学式）、畢業典禮（卒業式）の招待状は、ともに同じデザインで、鮮やかな二ツ折の朱紙に金字で文

字が描かれている。招待主はともに横湯通之であるが、前者は「南京西本願寺」、後者は「南京仏学院長」の肩書となっている。内容については次章で紹介する。

(36)

貫式の帰国後に発行されたものではあるが、両スクラップブックには「南京英霊奉安所壁画彫絵葉書」(画・藤澤古實・原精一・三輪孝・山本日子士・笹岡了一・高澤圭一・今村俊夫・川名廣喜)、「大東亜戦争記念報国絵葉書」(画・吉岡堅一・宮本三郎・小磯良平/但し、小磯の一枚は欠失)や、南京で開催された「大東亜戦争博覧会」のパンフレットなども挿みこまれている。ちなみに、南京玄武湖翠洲で開催された「大東亜戦争博覧会」の会期は「民国卅一年十一月一日起至卅日」とあり、昭和十七年(一九四二)四月に帰国した貫式は実際にこれを観覧することはなかったと思われる。また、「南京英霊奉安所壁画彫絵葉書」も発行元が「西本願寺南京別院」とあることから、やはり貫式の帰国後に作られたものと考えられる。

(37)

記事部分のみが切り抜かれた状態でスクラップされており、現段階では何新聞に寄稿したものかは不明である。

(38)

「西尾大将南京市内名勝視察予定」(西厳寺蔵「小川貫式資料」のうち「SCRAPBOOK」貼付、南京総司令部、昭和十六年三月)。なお、この予定表とともに、西尾大将の名で「祝儀」と記された祝儀袋も貼付されており、その裏面には「20」と記されている。

(39)

これらの古書類は、二〇二〇年度を目前に、他の和本とともに龍谷大学大宮図書館へ移管される予定である。

(40)

小川貫式「北京留学二際シ南京ヨリ日本ニ発送セシ典籍」(西厳寺蔵「小川貫式資料」、昭和十六年四月)。

(41)

小島勝「本願寺派開教使の日本語教育」(小島勝・木場明志編『アジア開教と教育』龍谷大学仏教文化研究叢書Ⅲ、法蔵館、平成四年三月)。他に、南京仏学院に触れた書としては、以下のものがあり、極めて簡潔にわかりやすく、仏学院について述べている。浄土真宗本願寺派国際部・浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『浄土真宗本願寺派 アジア開教』(本願寺出版社、平成二十年三月)。

(42)

小島氏は脚注において、「南京仏学院に関する資料は全て、現在、山

口泉熊毛郡田布施町の明楽寺住職で、元南京仏学院講師・南京別院駐在、承任を務めた走内(旧姓・亀谷)法城師より拝借し、ご教示を賜わった」としている(註41小島氏前掲書)。なお、南京仏学院で貫式とともに教鞭をとった法城、および、法城の残した資料については、「小川貫式資料」を補完するものとして本報告でも注目を寄せており、今回は中川剛がその専論を担当している(中川剛「新出の「亀谷法城資料」について」、本報告掲載)。ただし、本報告で「亀谷法城資料」と仮称して用いているものは、法城の自坊であった明楽寺に残されていたものではあるが、アルバム二冊と「南京仏学院だより」というニューズレターのほかは、戦前の手記や日記、書簡などで、

小島勝氏が南京仏学院について詳細に論じた際、明楽寺から借りたという『南京仏学院概況報告』や『南京仏学院一覽』などは含まれておらず、またそのすべてが南京逗留時代のものというわけではない。しかし、中川の論考にもあるように、山口県の田布施近辺は、

赤松連城をはじめ、近代の本願寺派にとつての重要人物を輩出したという意味では特異な土地柄である。その山口で育ち、海外開教に携わることになった開教使の前史を考察するため、法城という人そのものに関わる資料にもあえて着目し、本報告ではそれらを「亀谷

法城資料」と呼称してみた次第である。

「南京仏学院開学典禮秩序」(「SCRAP BOOK」貼付、西厳寺蔵「小川貫式資料」、民国二十九年七月一日)。

もう一枚は卒業典禮、すなわち、卒業式の招待状で、差出人は同じく横湯ながら、その表記は「南京仏学院院長」となっている(「南京仏学院卒業典禮秩序」(「SCRAP BOOK」貼付、西厳寺蔵「小川貫式資料」、年不明七月二十六日)。明楽寺旧蔵『南京仏学院一覽』には、

第一回卒業式は昭和十五年六月二十七日、第二回卒業式は昭和十六年七月二十六日あることからすると、これは二回目の卒業式のものとも考えられるが、昭和十六年七月二十六日の時点では貫式はすでに南京仏学院の講師職を辞して、山西省太原で崇善寺大蔵経調査の準備にとりかかっていた時であるから(高木祐紀・小川徳水・藤

井由紀子「史料紹介 西厳寺蔵「小川貫式資料」より太原崇善寺調

(44)

(43)

査関係資料」、『同朋大学仏教文化研究所紀要』第三十六号、平成二十九年三月）、或いはこれが第一回目卒業式のものである可能性もあるかもしれない。

〔表紙〕小川貫式先生「以上手書」 南京仏学院緘／地址西康路古林寺内

〔見開〕謹占於七月廿六日上午十一點鐘為本院學生舉行畢業典禮屆時恭請

駕臨指導 南京仏学院院長橫湯通之謹訂

是日午餐招待 席設古林寺

南京仏学院畢業典禮秩序

一、振鈴集合肅立

二、聖歌

三、向仏前行三鞠躬礼

四、誦經嘆仏偈

五、院長報告開會宗旨

六、報告院務工作及院生畢業

七、設立者訓詞

八、各機關長官訓詞

九、來賓致詞

十、院長給与畢業証

十一、授与賞品

十二、院長答謝詞

十三、院生答謝詞

十四、唱歌畢業式

十五、向仏前行三鞠躬礼

十六、撮影

(45) 明樂寺旧蔵『南京仏学院概況報告』、昭和十四年十二月（小島勝・木場明志編『龍谷大学仏教文化研究叢書Ⅲ アジア開教と教育』所引、法蔵館、平成四年三月）。

(46) 明樂寺旧蔵『南京仏学院一覽』、昭和十七年六月（註45前掲書所引）。なお、貫式の離職後のことになるが、当該一覽に記載された昭和十

七年当時の教職員体制をみると、院長として横湯通之、副院長として釈果言（古林寺住持）・佐藤大雄の名を挙げるほか、設立者として小笠原彰真の名を挙げてゐる。他に、南京仏学院関係の資料としては、興亜院華中連絡部調査機関による「南京及蘇州に於ける仏教の実情調査」という報告書があり、これによれば、日華仏教連盟南京總會の依嘱により、西本願寺が経営の責任者となり、その運営資金も本願寺派の開教事業費のなから年額三千六百円が充てられていたという。（『南京及蘇州に於ける仏教の実情調査』、『華中連絡部調査報告シリーズ』第二十二編、昭和十五年五月）。

(47) 註18横湯前掲文。ちなみに、南京青年会は昭和十四年十二月、新東亜建設の実現に向けて中国人同志を獲得することを目的として結成された組織で、「南京青年会綱領」には「一、本会ハ會員相互ノ心身更生ヲ期ス／一、本会ハ中国青年ノ更生ニ協力ス／一、本会ハ全東亜青年ノ更生に奉仕ス」とある（『南京青年』第一号、昭和十五年一月）。仏学院の学生たちは古林寺に寄宿し、規律ある団体生活をするとともに、普段は日本式の学生服を着用して授業や学外見学を行っていた。授業科目は、修身・日本語・仏教史・仏教概論・天台・華嚴・唯識・仏教論理・禅文学・仏前作法・国文習字・音楽体操を講義し、日本人と中国人の双方から職員数名と講師数名を選したという（註41小川氏前掲論文）。貫式はここで主事の役職を与えられ、日本式仏教の講義を行っていたとみられる。

(49) 小川貫式「南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興」（西巖寺蔵「小川貫式資料」、刊行年不明）。なお、貫式は当時の学術雑誌に放戒に関する論文を掲載している。貫式はこの論文において、清朝の度牒制廃止は僧尼の社会的地位の低下を招いたが、それに対して古林寺は放戒という入団儀礼を厳重に行うことで教団の維持を図ったこと、そしてそれが現代の放戒制度の確立につながったことを論じたうえで、現代の放戒に青少年の参加者が少ないことを憂い、「かうした現代の放戒によつて養成された僧尼が将来の仏教界に如何なる貢献をなし得るか、考慮を要する幾多の問題があると思ふ」と結んでいる（小川貫式「中国現代の放戒と戒疤・戒牒」、「支那仏教史学」第四卷第

三号、昭和十五年十一月)。

(50) 資料中には「調査見学」と題された北京や五台山での研究計画メモも残されている(小川貫式「調査見学計画」(西巖寺蔵「小川貫式資料」、記載年不明、昭和十六年か)。

(51) 京都の中央仏教学院に留学中の南京仏学院の学生が、伯楽町の貫式の住まいを訪ねることなどもあったという(西巖寺住職小川徳水談)。

新出の「亀谷法城資料」について

中川 剛

はじめに

明治以降の仏教教団における海外開教の研究は、近年、数多くなされている。^① 浄土真宗では小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』（法蔵館、一九九二年）、『浄土真宗本願寺派 アジア開教史』（本願寺出版、二〇〇八年）などが代表的な研究成果であるといつてよいだろう。

小島勝は、『アジアの開教と教育』の中で、本願寺派がアジア開教とともにおこなった日本語教育について詳細に論じており、^② この中で、南京仏学院に関して、多くの紙面を費やし言及している。南京仏学院は、日華仏教連盟が南京本願寺派に経営を委嘱された、現地人の僧侶養成機関であり、制度的にも組織的にも整備された日本語教育機関である。^③ 小

島は、「南京仏学院に関する資料は全て、現在、山口県熊毛郡田布施町の明楽寺住職で元南京仏学院講師・南京別院駐在、承仕を務めた走内（旧姓・亀谷）法城師より拝借し、ご教示賜った」として、^④ 法城の資料をもとに、南京仏学院の成立から授業内容まで広く言及している。

小島は、南京仏学院の開設・運営は、小川貫弑、走内法城が実質的に支えていたと言及しているものの、この著書が発刊された時期には、まだ法城は存命中であったからか、法城がどのような経緯で、南京仏学院の設置準備から、開設・運営に携わったのかに関しては記していない。二〇一六年より同朋大学では新出の「小川貫弑資料」手掛かりに、小川貫弑について調査してきた。そして、今回、本論で「亀谷法城資料」として扱うものは、写真アルバムや書簡、手記など、プライベートな部分

を含む資料であるが、これらは本願寺派の開教使として中国に渡り、南京仏学院の講師をつとめることになった法城という開教使をつぶさに知る上で、非常に重要だと思われる。法城の育った山口県徳山は、明治維新期に本山改革や大教院分離運動をおこなった赤松連城の徳応寺があり、大洲鉄然や島地黙雷との関係も深い。徳応寺では、先進的な女子教育や幼児教育が行われ、法城はその環境下で成長している。単に、元・小学校教師が開教史となり、南京仏学院で講師をつとめたということではなく、法城の経歴を含めて再考証することにより、南京仏学院の内実が明らかになる可能性も否定できない。「亀谷法城資料」について法城の経歴に触れながら、論じていこう。

一 亀谷法城資料の寄託経緯

「亀谷法城資料」は、二〇〇六年から始まった、西巖寺小川貫式資料の整理と同朋大学仏敎文化研究所の調査の過程で、二〇〇九年に山口県熊毛郡田布施町・明楽寺の離れから発掘された二冊のアルバムと日記、書簡、手記類の資料である。

亀谷法城は、中央仏敎学院卒業後、中国に渡り、南京仏学院の講師となった人物で、小川貫式とは、南京仏学院の同僚であった。徳水は父・小川貫式の没後、貫式が収集した資料類を整理しており、「亀谷法城資料」と一体化すれば、貴重な資料集になると考えた。徳水が「亀谷法城資料」

の存在を知った時点で、所蔵していた隠居部屋の離れは半壊状態であったが、遺族の許可を得て柴田幹夫（新潟大学）、野世英水（龍谷大学）によって保全された。本資料は現在、岐阜県各務原市の西巖寺に寄託されている。同朋大学仏敎文化研究所では、二〇一七年より戦時下の中国仏敎研究史を調査してきたが、小川貫式作製のアルバムと同じ写真も散見される。

本資料によって、浄土真宗本願寺派の海外教育機関であった南京仏学院での活動実態を補足する資料として位置付けることができるのではないだろうか。

二 法城と徳応寺

亀谷法城の経歴については、自著『親鸞夫妻の晩年』（教育新潮社、一九七九年）の巻末に略歴がある程度で、詳細について明かではなかった。

亀谷法城は、明治四十三年三月二日、父・亀谷西三、母・りつ子との間に、三男として生まれた⁵⁾。名は悌^{てい}三である。父、西三の職業は不明であるが、幼稚園に通わせていたことを考えれば、経済的に安定していたと考えられる。法城は、山口県徳山市下御弓町で育ち、町内の徳応寺が経営する徳山女学校付属鳳雛幼稚園に入園した。徳応寺は、明治維新期の本願寺派改革僧・赤松連城が住職をしていた寺である。連城の娘・安

子と婿養子の照憧が女子教育に力を注ぎ、明治二十三年に徳山女学校を設立し、明治三十四年には幼児園を設立した。ちなみに、照憧は勤王僧・与謝野礼巖の次男で、三男は与謝野鉄幹である。徳山女学校には、鉄幹や無我愛運動の伊藤証信も教師として在籍していたことがある。さらに、照憧、安子の子息は、宗教学者の赤松智城、東京大学の新人会の赤松克磨、女性運動家の赤松常子である。亀谷家は徳応寺の門徒ではなかったが、幼稚園での茶礼会や少年団、長じてから、仏教青年団に参加したことから、赤松家とは深い親交をもっていた。

その後、法城は徳山中学を卒業後、小学校に勤めることになる。亀谷法城資料に、徳山尋常高等小学校の用紙を使い、昭和三年・四年度の「学級経営案」を作成しているのが、徳山尋常高等小学校に勤めていたと考えられる。昭和三年の署名箇所に「准訓導心得」、昭和四年の署名箇所には「准訓導」と記されていることから、代用教員であったことが推察できる⁶⁾。この内容は、教育方針から個別の授業について詳細に記しており、教育者として並々ならぬ情熱があったと推察できる。

ところが、二十歳頃に罹病し、療養することとなる。その中で仏教に帰依したという。

法城の手記によれば、母方の祖母はクリスチャン、叔父は受洗して青山学院で学んでおり、真宗とキリスト教の双方から誘いがあったという。結局は、幼少時の家庭や徳応寺で馴染んだものから徳応寺で信徒となり、赤松智城から「法城」の法名を授けてもらうこととなる。「城」は「赤



昭和十二年撮影

松連城」と連城の師・若狭妙寿寺の「竹内棲城」からとり、「ご法義の城を守ってくれ」という意味で付けられたという⁷⁾。

昭和十年四月、浄土真宗本願寺派の僧侶資格を得るため、京都の中央教仏学院に入学することとなる。中央教仏学院は一年で得度の資格を得ることのできる、僧侶育成機関である。昭和十一年八月十五日に徳応寺衆徒として得度し、翌年の十二年教師資格を得た。

この時期に、作家の中里介山が主催する個人誌『峠』に投稿し、映画『大菩薩峠』第二編の感想を「亀谷悌三」名で寄稿している⁸⁾。内容は「大悲心」という題で、大菩薩峠の内容を称賛し、さらに、作品内に浄土真宗を体現する人物を登場させてほしいとの提案している。文学青年であったことを伺うことができる。

その後、福岡県直方市の西徳寺が経営する幼稚園で働き、徳応寺の仏教講習会にも参加していた。アルバムには、園児の中でオルガンを弾く様子や、演劇を脚色したことなどが記しており、初等教育の経験も豊富であったことが伺われ、南京仏学院の運営に大いに活かされたと思われる。

三 南京仏学院講師として

法城がどのような経緯で、南京仏学院の講師として赴任したのか。

昭和十四年五月十九日に法城は、蘇州出張所に補助員として就任し、その十日後の六月一日には南京出張所へ移動し、駐在・承任に着任している。この期間は、研修期間であったのかもしれない。『南京仏学院概況報告』によれば、「六月一日より南京城内西康路鳳山古林寺ノ一隅ヲ仮院舎トナシ創設準備ヲ開キ学生ノ募集ヲ始メタリ」とあるので、南京仏学院の準備に合わせて赴任したと考えるのが自然であろう。^⑩一ヵ月後の七月一日には、南京仏学院は南京の古林寺の一隅で開学し、法城は専任講師として日本語、音楽、体操、作務を受け持った。法城は、大出正篤の『日本語読本』を教科書にして日本語を教えている。このテキストは日本語に総ルビ付きで、全訳のついた教科書を予習させ、授業では教科書を離れて会話の練習をするという日本語学習法であり、短期間で習得することを目的としていた。^⑪

南京仏学院の時間表（昭和17年）				
月	日語	常識	音楽	仏教概論
火	日語	地理	同	論語
水	日語	歴史	古文	日本仏教
木	日語	勤行	同	同
金	日語	音楽	体操	論語
土	日語	浄土	同	課外講座
				作務

であろう。南京仏学院の院長で西本願寺南京別院輪番心得だった横湯通之は、昭和十五年に発足した南京青年会の機関紙「南京青年」に南京仏学院を紹介しているので引用しよう。^⑫

七月一日に開院式をいたしました。十三名の学生が来たわけです。

小川（貫式）君が教務主任として彼らと同居し、監督と指導を受け持ち、（梅）仁性という東京の東大にいたことがある人を助手に、中国僧の二三を講師に依頼してポツポツ始めたのですが、中々思うようにいきません。

第一、中国語を習得しない日本人が教育する点の至難事

第二、中国と日本寺院及中国の学院と日本の学院との組織や規定の相違している事

第三、風習を重んずる彼等を知るまで苦しかった事

第四、日本僧に対する信頼がどの程度かよくわからぬ事
等、よく筆舌に尽くしえぬ幾日かを経て、九月になると学生も先生も病氣続出という有様です。～（中略）～とうとう二週間余の休業をしなければならなくなりました。

上海の西本願寺総監部からは一時、小川君たちを日本に帰して静養させたらどうかというて来るし大事な諸君を死なせてはならず、やりかけた今、中止してはこれだけのものが集まるかが疑問だし全く夢中になってやりくりして十一月に入るといくらか態勢がよくなって来ました、それに亀合法城が教える音楽や童謡舞踏などが大

変興味をひいて少しずつやっていた日本語が使用に堪えるようになって来たのと厨子がいなくなつて暫く自炊生活をやらせてみるとこれが学生の共同生活感を刺戟したりして前途が明るくなつたようです。

(カッコ内は筆者が補字し、現代仮名遣いに直した。)

「大和」——中国青年僧に伍して——「南京青年」(昭和十五年二月) 南京仏学院の開院した直後に、様々な困難があつたことが伺える。南京仏学院では、法城が体操や音楽を取り入れたことによつて、日本語の習得に大いに役立っていた。具体的には、教科書の例文をもとに法城が作曲し、合唱させたり、日本語の弁論大会に生徒を参加させ、朗読や歌唱を発表させるなど、精力的に日本語指導をおこなつた。¹³この他に、また、校内誌として、「南京仏学院だより」などを謄写版で作成するなど、目覚ましいものがあつた。昭和十七年段階で、法城が受け持つた授業時間は一ひと月、九二時間中、三八時間であつた¹⁴というから、小川貫式が、南京仏学院を辞して、昭和十六年四月到北京へ移つた以後は、実質的に法城によつて運営されていたのであつた。

四 亀谷法城資料

亀谷法城資料は、二冊のアルバムと「南京仏学院だより」、「学級経営案」書簡、日記類によつて構成されている。

【特別調査報告】西巖寺蔵「小川貫式資料」調査報告(三三)

アルバム no. 3 には、一七三点の写真が貼付され、昭和十一年から十三年までの写真が多く、この他に、法城の幼少期の写真も数点貼付されている。説明文も多く書かれており、法城が中国に渡る以前の行動を知る資料である。アルバム no. 4 には、写真が二八五点貼付され、説明文は少ないが、南京仏学院生徒の個人写真や授業風景、行事に参加した際の写真が多く収められている。南京仏学院の実態や法城の人脈関係を解明することができると思われる。

「南京仏学院だより」は、小島勝が法城に調査した時点で、「南京仏学院概況報告」「南京仏学院一覽」「南京仏学院だより」(昭和十七年三月—十九年三月)と共に、法城によつて保存されていたが、残念ながら「南京仏学院だより」(昭和十七年四月)のみ現存している。卒業生の音信や南京仏学院の一か月間の動向が記載されているなど、貴重な資料である。

「学級経営案」は昭和三、四年に書かれたものであるが、南京仏学院で日本語講師としてどのような講義をしていたのかを類推する上では、重要な資料である。「学級経営案」では、具体的に「読み方」「話し方」「綴り方」の他、「修身」や「体操」に臨む姿勢について記述し、徳山尋常高等小学校の学級経営方針を南京仏学院へ導入したと考えられるからである。書簡は五十通ほどあり、主に、南京を離れて東京の築地別院に勤めていた、昭和十九年頃のものが多いが、南京仏学院の学生からの書簡なども含まれる。今回、日記については戦後以降のものは「亀谷法城資

料」とはせず、戦前に書かれたもののみを調査対象としたが、該当するものは八点である。劣化も激しく、年代も揃っていないが、アルバムと対照する際に参考資料として有用であろう。

手記は、原稿用紙二〇行×一〇文字、七枚で「智城師のことども」と題するものである。亀谷と徳応寺の赤松家との親交がいかなるものであったのか、知ることができる好材料である。

七 ちぢぢぢ

法城は、昭和一九年には帰国し、一時、築地別院で勤めた後明楽寺の住職となった¹⁵⁾。戦後、山口教区同朋会指導主事を任じられ、また、巡回相談員として活躍した。雑誌『大乘』に「残雪」(一九六四年発表)、教育新潮社から『親鸞夫妻の晩年』(一九七九年)を出版し、また昭和三十一年、山口で信生活団を主管する釜瀬春鳳が出版した『歌の手帳』では、釜瀬春鳳の詞に作曲するなど、多才な面を持つ僧侶であった。法城は、平成十年五月十五日に亡くなった。生前、小川貫式は、「なんでもこなす器用な人だった」と息子の徳水に話していたという。

「亀谷法城資料」は今後、「小川貫式資料」の写真と突合し、精査していく過程で人物が特定されていくと思われる。この「新出資料」によって、南京仏学院と日華仏教連盟や特務機関とどのような人脈形成がなされたのか、今後の研究によって明らかにすることを期待したい。

注

- (1) 近年では愛知大学東亜同文書院センターが中心となり藤井草宣や水野梅暁について研究成果を発表している。
- (2) 小島の論文は、現地に派遣された元・開教使のインタビューや所蔵している写真、記録に基づいて構成したものである。
- (3) 小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』(法蔵館、一九九二年)、一七三頁。
- (4) (3) 前掲書、一三五頁。
- (5) 亀谷アルバム及び亀谷自筆手記による。
- (6) 『日本近代教育史辞典』(平凡社、一九七二年)二〇二頁。
- (7) 亀谷自筆手記は、原稿用紙二〇行×一〇文字、七枚で「智城師のことども」と題するものである。
- (8) 中里幸作編『峠』(隣人之友社、一九三五年五月)、七七頁。
- (9) 海外開教要覧刊行委員会編『海外開教要覧』(海外開教要覧刊行委員会、一九七四年)、二二七頁、二二八頁。
- (10) (3) 前掲書、一七三頁。
- (11) 多仁安代『大東亜共栄圏と日本語』(勁草書房二〇〇〇年)、一八頁。
- (12) 横湯通之「大和」『南京青年』第二号(南京青年事務所、一九四〇年五月)、二頁。
- (13) 「南京仏学院だより」(昭和十七年四月) 五頁
- (14) (12) 前掲書、二頁。
- (15) 亀谷宛書簡による。

参考文献

- 小島勝・木場明志編『アジアの開教と教育』(法蔵館、一九九二年)
 浄土真宗本願寺派国際部 浄土真宗本願寺派アジア開教史編纂委員会編『浄土真宗本願寺派アジア開教史』(本願寺出版社、二〇〇八年)
 走内法城『親鸞夫妻の晩年』(教育新潮社、一九七九年)
 寺史編集委員『寺史』(徳応寺、平成四年)
 龍谷大学三百五十年史編集委員会『龍谷大学三百五十年史』(通史編上(龍

谷大学、二〇〇〇年)

多仁安代『大東亜共栄圏と日本語』(勁草書房、二〇〇〇年)

槻木瑞生編『アジアにおける日本の軍・学校・宗教関係資料 第4期 日

本佛教団(含基督教)の宣撫工作と大陸』第3卷(龍溪書舎、二〇一

二年)

本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『興亜院と戦時中国調査 付刊行物所在

目録』(岩波書店、二〇〇二年)

南京関係資料一覧

——西巖寺蔵「小川貫式資料」・明楽寺旧蔵「亀谷法城資料」より

藤井 由紀子
小川 徳水
中川 剛
日比野 洋文

本稿は、本年度の調査報告で調査対象とした、岐阜県各務原市西巖寺所蔵の「小川貫式資料」中の南京関係資料、および、山口県熊毛郡田布施町明楽寺旧蔵の「亀谷法城資料」を、今後の調査の便宜のため、リスト化したものを、参考として掲載することにしたものである。

小川貫式（1912年3月1日～2006年9月29日）と亀谷法城（走内法城…1910年3月2日～1998年5月15日）は、その生没年を見てもわかるように、ほぼ同年代であり、昭和十四年（一九三九）七月一日に開学式が執り行われた、その開学直後の南京仏学院で講師としてともに教鞭をとり、立ち上げ時期の困難を支えた同志ともいえるべき関係にあった。「小川貫式資料」調査はまだ途次であり、本リストも覚書程

度のものであるが、これらは日本軍による南京陥落から約一年後、軍の特務機関と居留日本人の手によって、さまざまな宣撫工作が進められようとしていた頃の、宗教工作の一端を示してくれる資料群でもある。関心ある方々に資料の存在を知っていただきたいと希うばかりである。

なお、「小川貫式資料」に関する調査は、二〇一八年度以降、「日中戦争下の学術調査と人的交流を探るプロジェクト―興亜留学生小川貫式の記録より」として、科学研究費の助成事業（基盤研究C 課題番号18K00917 二〇一八～二〇二〇年度 研究代表者藤井由紀子）に採択されたことで、今後はアルバムやスクラップブックに貼付された写真一枚一枚も含めて、資料をすべて画像つきのデータベースとして公開していくことを予定し

ており、現在、そのための撮影作業を進めている。特に写真資料の内容については、本リストでは不明な部分もまだ残されているが、最終的には他の写真資料等とつきあわせながら、内容を正確に特定していきたい、と考えている。

【凡例】

・本リストには、西巖寺蔵「小川貫式資料」のうち、南京関係のものと判断される資料と、明楽寺旧蔵「亀谷法城資料」のうち、現在、西巖寺に寄託されている資料を掲載している。紙幅の関係もあり、リストの項目は、資料名、数量、形態、作成者（発行者）、年代の最小限とし、必要に応じて内容に関する記述を加えた。

・小川貫式、亀谷法城、両資料ともに未整理のまま保存されていた期間も長く、資料によっては大まかな仕分けを済ませただけの状況を記すにとどまっている場合もある。また、本報告は「小川貫式資料」の研究プロジェクトの経過報告であり、今回のリストからは漏れてしまったものがある可能性も否定できないが、これについては、いずれ統括報告で修正し、補足していきたいと考えている。

・本報告で「亀谷法城資料」と仮称しているものは、法城の自坊であった明楽寺に残されていたもので、アルバム二冊と「南京仏学院だより」というニューズレターのほかは、戦前の手記や日記、書簡などで、そのすべてが南京逗留時代のものというわけではない。しかし、海外開

教に携わることになった開教使の、その前史を知るという意味において、本報告では法城という人そのものに着目する必要性を考え、これらも資料リストに加えている。

・本報告で「亀谷法城資料」と仮称しているものは、約十年前、新潟大学の柴田幹夫氏、龍谷大学の野世英水氏が、関係者の許可のうえ、法城の自坊であった明楽寺の住居スペースから発見したものである。現在は西巖寺に寄託されていることもあり、今回、「小川貫式資料」を補完する資料として活用することにし、「両氏からはそのご快諾をいただいた。両氏のご配慮に心より感謝申し上げます。

【掲載写真リスト】 32枚（撮影：日比野洋文、中川剛、小川徳水）

- ・写真1 「スクラップブック」（南京仏学院関係）／「小川貫式資料」
- ・写真2 「小川貫式と亀谷法城」南京別院建設事務所前（向かって右が貫式）／「小川貫式資料」
- ・写真3 「南京仏学院教室風景」／「小川貫式資料」
- ・写真4 「南京仏学院授業風景」体操授業／「小川貫式資料」
- ・写真5 「南京仏学院授業風景」学生と貫式／「小川貫式資料」
- ・写真6 「南京仏学院授業風景」学生と法城／「小川貫式資料」
- ・写真7 「南京仏学院授業風景」毘盧寺観音一周年法会参列／「小川貫式資料」
- ・写真8 「南京仏学院集合写真」／「小川貫式資料」

- ・写真9 「南京仏学院第一回卒業式」／「小川貫式資料」
- ・写真10 「南京仏学院第二回入学式」／「小川貫式資料」
- ・写真11 「南京仏学院開院式の招待状」／「小川貫式資料」
- ・写真12 「SCRAP BOOK」 絵葉書貼付／「小川貫式資料」
- ・写真13 「新聞記事（貫式古林寺記事）」／「小川貫式資料」
- ・写真14 「南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興」／「小川貫式資料」
- ・写真15 「現代支那に於ける仏教活動（居士仏教の変遷）」／「小川貫式資料」
- ・写真16 「SCRAP BOOK」 私信貼付／「小川貫式資料」
- ・写真17 「西尾大将視察極秘予定表」／「小川貫式資料」
- ・写真18 「研究計画 東亜近代仏教の歴史的研究」／「小川貫式資料」
- ・写真19 「日華仏教連盟結成総会並大会秩序表」／「小川貫式資料」
- ・写真20 「写在『東亜仏教大会』之前」／「小川貫式資料」
- ・写真21 「PHOTOGRAPH ALBUM」／「小川貫式資料」
- ・写真22 「棲霞山」千仏巖での貫式・日本兵／「小川貫式資料」
- ・写真23 「蕭景墓」／「小川貫式資料」
- ・写真24 「蕭愴碑」小川貫式と軍人／「小川貫式資料」
- ・写真25 「大明南蔵始末攷」／「小川貫式資料」
- ・写真26 「棲霞山史蹟 南京青年会叢書」／「小川貫式資料」
- ・写真27 「中日文化（日本文）創刊号・目次」／「小川貫式資料」
- ・写真28 「亀谷法城アルバム」／「亀谷法城資料」
- ・写真29 「褚明誼と亀谷法城」／「亀谷法城資料」
- ・写真30 「南京仏学院」仏学院学生／「亀谷法城資料」
- ・写真31 「日語大会風景」／「亀谷法城資料」
- ・写真32 「南京英靈奉安所」／「亀谷法城資料」

西蔵寺蔵 南京関係資料（日中戦争期を中心に）

「小川貫弍資料」【亀谷法城資料】一覽 / 2019年3月31日現在

作成：藤井由紀子・小川徳水・中川剛、日比野洋文

西蔵寺蔵 「小川貫弍資料」

	史料名	数量	形状	著者・発行者	年代	西暦
1	日華仏教連盟結成総会並大会秩序表	1点（1枚）	印刷物（南京誠文堂印刷製）	日華仏教連盟	無表記（昭和14年4月か）	1939/400
2	日華仏教連盟南京総会成立二周年記念宣言	1点（1枚）	印刷物（日華仏教連盟南京総会の赤スタンプ印あり）	日華仏教連盟南京総会	無表記（昭和15年か）	1940/0000
3	研究題目 東亜近代仏敎の歴史的研究 表：研究題目、調査見字計画 山西省五台山巡礼計画 北京購入撰定書目 近代支那の文化生涯 裏：山東省 北朝觀音石刻	1点（12枚）	数種用紙、インク書 200字詰原稿用紙（天真堂製）	小川貫弍	無表記（不明）	
4	現代支那に於ける仏教活動	1点（101枚）	原稿用紙裏 400字詰原稿用紙、インク書（目次&書きかけ原稿） 序言：4枚、第一章：5枚、第2章：89枚、第6章：3枚	小川貫弍	無表記（不明）	

序言

第一章 清朝初期の四大居士／本論近代支那に於ける居士仏教

第一章 居士の変遷と居士伝の編纂

第二章 居士仏教台頭の緣由

周安士居士の浄土信仰

周夢顔居士

鄭学川居士の刻経事業

畢榮風居士の禪病論

楊仁山居士の仏教復興事業

金陵刻経処

仁山居士の日本仏教批判

楊仁山居士の仏敎教学

楊仁山居士の仏敎教育事業

羅尊聞居士の仏敎教学

羅台山の浄土敎

彰際清居士の閉関念仏

	<p>彰察清居士の仏教信仰 彭尺木の華嚴念仏 彭尺木の三教思想 魏承貫居士の三教思想並仏教觀 魏承貫居士の仏教研究 第六章 清末居士の仏教復興運動</p>						
5	蘇州雲巖山印光大師茶罷會葬之記	1点 (5枚)	印刷物裏書 (表書：日華仏教連盟結成總會並大会秩序表)、インク書 (図のみ鉛筆)	小川貫弉	無表記 (不明)		
6	南唐国と金陵清凉山	1点 (2枚)	印刷物裏書 (表書：日華仏教連盟結成總會並大会秩序表)、インク書	小川貫弉			
7	摂山 樓霞寺攷	1点 (29枚)	薬半紙、ペン書	小川貫弉	昭和14年11月17日	19391117	
8	樓霞山の大明南蔵経に就いて	1点 (43枚)	200字詰原稿用紙 (天真堂製)、ペン書	小川貫弉	無表記 (不明)		
9	樓霞山の大明南蔵仏典	1点 (2枚)	印刷物裏書 (表書：日華仏教連盟結成總會並大会秩序表)、インク書	小川貫弉	無表記 (不明)		
10	大明南蔵始末攷 大明南蔵始末攷 南蔵雕印 南蔵補刻考	1点 (9枚)	印刷物裏書 (表書：日華仏教連盟結成總會並大会秩序表)、インク書	小川貫弉	無表記 (不明)		
11	六朝の勝地 千仏の名藍 樓霞山史蹟 (南京青年会叢書・第一輯)	1冊	洋装本	小川貫弉 (発行：南京青年会)	昭和15年7月1日	19400701	
12	中日文化 (日文版) 創刊号	1冊	【中日文化 (日文版)】創刊号	中日文化協会	中華民國30年3月	19410300	
13	日中文化協会に関するメモ	1点 (3枚)	サラ紙3枚	小川貫弉		19410325	
14	南京史跡メモ (古林寺・清凉山・柳葉菴・北極閣・昆廬寺・鶏鳴寺)	1点 (6枚)	印刷物裏書 (表書：仏教関係中国文テキスト)、インク書	小川貫弉			
15	王安石に関するメモ	1点 (2枚)	印刷物裏書 (表書：仏教関係中国文テキスト)、インク書	小川貫弉			
16	雨花台史話	1点 (14枚)	原稿用紙「天真堂特製」	小川貫弉			
17	大陸布教対策論 はしがき 二 大陸布教の現状 三 大陸布教論 一 はしがき 二 現在に於ける本派大陸布教の状況 大陸布教の中心眼目 實際布教対策	1点 (37枚?)	400字詰原稿用紙 (太原書店製)、ペン書	小川貫弉	無表記 (不明)		

	人生觀の変遷と布教対策 大陸布教対策論 (章立て)							
18	北京留学二際し南京ヨリ日本ニ発送セシ典籍	1点 (31枚)						
19	写在「東亜仏教大会」之前	1点 (2枚)	200字詰原稿用紙 (天真堂製)、インク書	小川貫弉	昭和16年 4月		19410400	
20	類	1点	騰写版印刷 紙本墨書	大醒 果言「小川先生教 正 当勤精進 南 京鳳山古林寺釈氏 果言贈」	民国30年 4月 4日		19410404	
21	扉面軸 本願寺南京視察記念か	1点	紙本墨書	古林寺果言ほか				
22	色紙「青山横北／南京古林寺轉愧僧果言題贈」	1点	紙本墨書	古林寺果言				
23	色紙「教誨良深／南仏学院全体学生敬贈」	1点	紙本墨書	南京仏学院学生				
24	色紙「小川先生遠涉我國／金山仁山」	1点	紙本墨書	金山仁山				
25	色紙「仏学院成就／南京仏学院正金山仁山」	1点	紙本墨書	金山仁山				
26	色紙「之而師範／沙門大醒賛」	1点	紙本墨書	大醒				
27	普寧版題記年譜考 表： 表： 普寧版題記年譜考 裏： 裏： 中央仏教学院に留学中の南京仏学院生への手紙下書	1点 (5枚)	裏書、インク書 (一部鉛筆書)	小川貫弉	無表記 (不明)			
28	東亜史「中国仏教の特色について」(中央仏教学院学生考査用紙)	複数点		小川貫弉				
29	小川貫弉宛封筒 (伯楽町松村豊方)	1点	29 白封筒1枚 (手紙なし)	学生 本派本願寺中南支 布教總監部	昭和15年 7月22日		19400722	
30	小川貫弉宛封筒 (南京大平路白菜園三八号)	1点	白封筒1通 (手紙2枚)	杉紫朗 (差出人)	昭和15年 7月28日		19400728	
31	小川貫弉宛封筒 (藤原村持田)	1点	茶封筒1通 (手紙なし)	横湯通之(差出人)	民国29年 8月10日		19400809	
32	小川貫弉宛封筒 (藤原村持田)	1点	白封筒 (手紙なし)	谷口法行(差出人)	民国29年 8月14日		19400814	
33	小川貫弉宛封筒 (白菜園／西本願寺／南京市府城)	1点	中国製封筒1枚 (手紙なし)、買上伝票1枚 (ワ イカム代、華中百貨店)	南京市府城	昭和16年 3月23日		19410323	
34	小川貫弉宛封筒 (南京大平路白菜園三八号／南京西本願寺)	1点	白封筒1枚 (手紙なし) ※調査カード17枚が 封筒に在中するが手紙とは無関係	高雄義堅(差出人)				
35	小川貫弉宛封筒 (宣伝部織)	1点	中国製城封筒1枚 (手紙なし)、名刺1枚 (国 民政府宣伝部室伏クララジ)	国民政府宣伝部				
36	小川貫弉宛絵葉書 (龍谷大学仏教史学研究室)	1点	絵葉書1枚	海野雄雄(差出人)	16日付(年月不明)			
37	小川貫弉宛絵葉書セット (伯楽町)	1点	絵葉書セット1部 (九江十六勝絵葉書8枚：吉 田初三郎画伯筆)、絵葉書1枚 (北京玉泉山)	谷口法行(差出人)	昭和19年 5月 2日		19440502	
38	樓閣寺志二巻	2巻						
39	靈谷禪林志十五巻首一卷	1巻						
40	靈谷禪林志残九巻存巻第一至第九・首一卷	1巻						

41	古林寺志下巻第九	1巻						
42	金陵刻經処流経典目録一卷	1巻						
43	江南図書館善本書目	1巻						
44	金陵梵刹志	3巻						
45	首都志 附図	1点						
46	明宮城図 (昭和十四年十二月首都志ヨリ)	1点 (9枚)		謄写版印刷				
47	整理備置制度論	1冊			漢口仏教会 商務印書館	民国18年 8月	19290800	
48	金陵名勝写真図	1点				中華民國14年10月	19251000	
49	金陵附郭古蹟路線図	1冊						
50	南京及び蘇州に於ける基督教の実情調査	1冊			興亜院華中連絡部	昭和15年 5月	19400500	
51	仏学半月刊 第10巻第4号第223期 印光記念特刊	1冊				中華民國30年 2月 16日	19410216	
52	中華民國三十一年曆書 (建設東亜新秩序のイラスト)	1点						
53	現代支那の仏教研究一斑 南京内学院	1点				昭和16年 1月 5日		
54	龍池清「支那仏教教団の特異性」(新聞スクラップ)	1点				昭和16年 1月 5日		
55	小竹文夫「支那風俗史考」(新聞スクラップ)	1点						
56	南京兵用衛生地史ノ参考外編	1点 (37枚)		謄写版印刷		中支那防疫給水部 佐藤大雄	昭和14年12月	19391200
57	煉瓦ト瓦ノ造り方	1点 (21枚)		謄写版印刷		中支那防疫給水部 陸軍衛生軍曹 山 口張一	昭和14年11月	19391100
58	南京附近の生物について	1点 (17枚)		謄写版印刷		中支那防疫給水部 陸軍医大尉佐藤大 雄	昭和15年 1月20日	19400120
59	支那地誌蔵書目録 其一 江蘇省、浙江省、安徽省	1点		謄写版印刷		中支那防疫給水部 図書部	昭和15年10月 1日	19401001
60	二木班作業報告書 (軍隊作業報告書)	1点 (1枚)		謄写版印刷				
61	支那事変 戦跡の栞 下巻	1冊			陸軍兵部	昭和13年12月	19381200	
62	PHOTOGRAPH ALBUM	1冊 (台紙12紙/左開き)			小川貫二	昭和15年か(アル バム作成時期)	19400000	

表紙見返し
挿込み
中表紙

商品シール添付「BUMPODO/TOKYO/
OSAKA FUKUOKA」
手製袋入り写真 4枚(照本王石谷絵南巡聖典図:
新民会中央指導部/北京司法部街)
表裏白紙

1表	写真3枚 (樓霞山放生池より弥勒殿を望む、樓霞山舍利塔基壇彫刻) 『樓霞山史蹟』使用写真		
1裏	写真3枚 (樓霞山舍利塔基壇彫刻)、既製写真1枚 (明太祖遺像) 『樓霞山史蹟』使用写真		
2表	写真3枚 (樓霞山舍利塔引接仏)、朱印1枚 (破れあり) 『樓霞山史蹟』使用写真		
2裏	写真5枚 (樓霞山舍利塔・千仏藏・三聖殿) 『樓霞山史蹟』使用写真		
3表	写真6枚 (樓霞山、小川貫式、中村氏) 写真1枚に裏書『樓霞山ニテ／左、中村氏 私事務所ノ職員ヲス／右、小川先生』		
3裏	写真2枚 (高僧伝)		
4表	写真3枚 (高僧伝、往生要集)		
4裏	写真4枚 (樓霞山山容、仏像、舍利塔)		
5表	写真4枚 (樓霞山舍利塔、飛天ロープ、舍利塔基壇)		
5裏	写真4枚 (蕭憺墓+小川貫式・軍人、石碑、石獸)		
6表	写真3枚 (蕭景墓、石柱、石獸)		
6裏	写真4枚 (蕭秀墓、石碑、石獸)		
7表	写真4枚 (蕭秀墓、石碑、石獸)		
7裏	写真4枚 (仏像、宣宗実録)		
8表	写真4枚 (大報恩図絵図、歴代編年釈氏通鑑)		
8裏	写真4枚 (高僧伝一部、大唐大慈恩寺三藏法師伝序)		
9表	写真5枚 (版本経典、高僧伝一部、十門弁惑論) ※1枚は貼付されていたものではない可能性		
9裏	写真3枚 (南京普徳寺、龜趺・、門前の小川貫式と中国僧)		
10表	写真4枚 (中国人僧、日本人、磚塔、舍利塔)		
10裏	写真1枚 (印光老師遺影)	庚辰冬月	19400000
11表	写真5枚 (雨花台図、南巡盛典)		
11裏	写真2枚 (明方正学先生墓、印光老師)		
12表	写真1枚 (印光老師)	庚辰冬月	19400000
12裏	(貼付物なし)		
中表紙	(貼付物なし)		

裏表紙 スクラップブック (ペーパー)	1冊(台紙38枚/右開き)	(貼付物なし)	小川貫二氏
63			
裏		(貼付物なし)	
1裏		(貼付物なし)	
2裏		写真4枚 (南京弘学院、学生、体操風景、掃除風景)	
3裏		写真5枚 (南京弘学院、学生、教室風景) 写真1枚に裏書「貫二先生恵存/小boy贈」	昭和14年 4月20日
3裏		写真5枚 (南京弘学院、小川貫二氏) 写真1枚に裏書「小川貫二先生恵存/1939.4.20/孫自強敬贈」	1939.4.20
3裏		写真5枚 (南京弘学院学生、谷口法行子息、小川貫二氏) 写真1枚に裏書「行昭/生後六十八日目」	
4裏		写真5枚 (本願寺南京別院建設事務所、式典風景、小川貫二氏、亀谷法城)	
4裏		写真5枚 (式典風景、学生集合写真) 写真1枚に裏書「かんのん一週年法会/びる寺にて」	
5裏		写真4枚 (南京弘学院集合写真、学生、教室、南京風景)	
5裏		写真6枚 (式典風景、学生)	
6裏		写真3枚 (式典風景、学生) 写真1枚に裏書があるが判読できず	
6裏		写真5枚 (山久商店、式典風景、学生集合写真)	
7裏		写真4枚 (南京弘学院、授業風景、食事風景、学生、小川貫二氏)	
7裏		写真4枚 (本願寺南京別院建設事務所、式典風景、小川貫二氏)	
8裏		写真4枚 (学生、式典風景、小川貫二氏)	
8裏		写真3枚 (明方正学塾、学生、小川貫二氏)	
9裏		写真5枚 (学生、式典風景、亀谷法城)	
9裏		(貼付物なし)	
10裏		(貼付物なし)	
10裏		(貼付物なし)	
11裏		写真7枚 (仏龕石像、碑文、相国寺)	
11裏		(貼付物なし)	
12裏		写真9枚 (寺院、獅子石像、大雄宝殿)	

12裏	写真10枚 (寺院建物、仏像、龍壁)
13裏	(貼付物なし)
13裏	(貼付物なし)
14裏	(貼付物なし)
14裏	(貼付物なし)
15裏	(貼付物なし)
15裏	(貼付物なし)
16裏	(貼付物なし)
16裏	写真5枚 (願和園風景、願和園での小川貫式)
17裏	写真6枚 (北京天安門広場での釈迦牟尼仏聖誕 運合慶祝大会か)
17裏	写真6枚 (寺院建物か)
18裏	写真4枚 (北京別院中庭、小川貫式、磬城大兄)
18裏	写真5枚 (北京別院遺骨奉安殿、小川貫式、磬 城大兄)
19裏	写真5枚 (北京別院、落成式)
19裏	写真5枚 (北京別院、磬城大兄)
20裏	写真3枚 (学生集合写真)
20裏	(貼付物なし)
21裏	(貼付物なし)
21裏	写真2枚 (樓霞山舍利塔、三聖殿)
22裏	写真2枚 (樓霞山舍利塔、千仏殿)
22裏	写真2枚 (キャプションなし)
23裏	写真3枚 (キャプションなし)
23裏	(貼付物なし)
24裏	(貼付物なし)
24裏	(貼付物なし)
25裏	(貼付物なし)
25裏	(貼付物なし)
26裏	(貼付物なし)
26裏	(貼付物なし)
27裏	(貼付物なし)
27裏	(貼付物なし)
28裏	(貼付物なし)
28裏	(貼付物なし)

		29表 29裏		(貼付物なし)				
		30表 30裏		(貼付物なし)				
		31表 31裏		(貼付物なし)				
		32表 32裏		(貼付物なし)				
		33表 33裏		(貼付物なし)				
		34表 34裏		(貼付物なし)				
		35表 35裏		(貼付物なし)				
		36表 36裏		(貼付物なし)				
		37表 37裏		(貼付物なし)				
		38表 38裏		(貼付物なし)				
		39表 39裏		(貼付物なし)				
		40表 40裏		写真1枚 (中国風景)				
		41表 41裏		写真1枚 (中国風景)				
		42表 42裏		(貼付物なし)				
		裏表紙		(貼付物なし)				
64	SCRAP BOOK 表紙見返し 挟込み資料	1冊 (20枚) 右開き	包紙1枚 (南京胡玉興銀樓) 白封筒1枚 (手紙なし、南京仏学院小川貫式宛)	挟込み資料2部 (包紙・聯) 「漢瓦当文延年益寿／周銅鑄銘富貴吉祥」「雲紋吉祥呈聯福寿／花開富貴竹報平安」	小川貫式	本派本願寺中南支 布教総監部	昭和15年6月17日 付	19400617

1表	繪葉書2組 (南京英靈奉安所壁面彫影繪葉書、大東亜戦争記念報國繪葉書) 切手台帳6枚 (日本切手31枚貼付) 台紙書込 み「武義中学校／梅華寮／小川貫弍」 封筒表書き1枚 (南京仏学院小川貫一 (一→一) 宛)、日本切手24枚		
1裏	日本切手5枚		
2表	日本切手18枚		
2裏	日本切手4枚		
3表	白封筒1枚 (手紙なし、南京西本願寺気付小川 貫弍宛、差出高雄義堅)、日本切手1枚 未使用葉書1枚、日本切手5枚		
3裏	白封筒1通 (乳状在中、古林律寺小川貫弍宛)、 日本切手2枚	加藤繁 (差出人)	19401025
4表	繪葉書1枚 (南京仏学院小川貫弍宛)、日本切 手19枚	西光達 (差出人)	
4裏	繪葉書1枚、日本切手16枚	小川貫弍(未投函)	
5表	日本切手13枚		
5裏	茶封筒1枚 (手紙なし、南京西本願寺小川貫弍 宛)、日本切手3枚、新聞記事切り抜き2枚 (靖 国神社創祀記念切手発売、新四錢切手お目見得)	小川宮三郎 (差出 人：西巖寺總代)	19390610
6裏	封緘葉書1枚 (南京仏学院小川貫弍宛)、日本 切手11枚	高雄義堅(差出人)	19410418
7表	日本切手15枚		
7裏	日本切手2枚		
8表	繪葉書1枚 (南京仏学院小川貫弍宛)	宇野圓空(差出人)	19400101
8裏	(貼付物なし)		
9表	戸籍1通 (小川普観)		
9裏	招待状1通 (南京仏学院卒業式、小川貫弍宛)		年不明0726
10表	中国切手9枚		
10裏	中国切手4枚		
11表	中国切手3枚(大清国切手+中華民国スタンプ)		
11裏	白封筒1枚 (南京西本願寺小川貫弍宛)、中国 切手7枚	差出人不明	
12表	中国切手17枚		

12裏			中国製白封筒1通(手紙あり、仏学院教務主任小川貫弍宛)、中国製茶封筒1枚(手紙なし、西本願寺小川貫弍宛)、中国切手13枚 国旗デザイン1枚(中華民国国旗、青天白日部分)、中国切手12枚 招待状1通(南京仏学院入学式)、中国切手10枚	鎮江金山大観音閣 仁山■(差出人) 日華仏教連盟総会	年不明0106
13裏			未使用中国葉書1枚、中国切手1枚 白封筒1枚(手紙なし、南京仏学院小川貫弍宛)、中国切手3枚 白封筒表書き1枚(南京西本願寺小川貫弍宛)、中国切手15枚(4枚に「山西」スタンプ) 白封筒1通(手紙3枚、南京仏学院法啓宛)、中国切手4枚 招待状1通(差出)、中国切手9枚 招待状1通(差出果言)、中国切手16枚 スタンプ印1個(国民政府遷都記念)、中国切手10枚	北京本願寺 本京金陵寺 揚州法蔵寺定一(差出人) 王長春(差出人) 果言(差出人)	19400129
14裏					
15裏					年不明0301
16裏					
16裏					19400330
17裏					
17裏					
18裏					
18裏					
19裏					19400114
19裏					
20裏					19410305
20裏					
65	SCRAP BOOK 表紙見返し 挟込み資料 INDEX 1表	1冊(30枚) 右開き	パンフレット1枚(大東亜戦争博覧会) (貼付物なし) 新聞切抜き1枚(「南京新報」民国29年9月28日付「南京仏学院招生」(募集要項))	小川貫弍	19421100 19400928

1 裏	新聞切抜き 1 枚 (〔不明〕 第407号、陰曆 8 月 24日付「板垣総参謀長、英靈奉安祈参拜」)	小川貫次	年不明0824
2 表	古林寺沿革 1 部 (〔南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興〕)		
2 裏	新聞切抜き 3 枚 (〔不明〕「南京鳳山古林律寺と天下第一戒壇の復興」上・中・下)	小川貫次	
3 表	新聞切抜き 2 枚 (『経済新聞』「古林寺天下第一戒壇誌」(上) (下))	小川貫次	
3 裏	新聞切抜き 1 枚 (〔南京大陸新報〕 第601号「永楽一文銭の文化」(下)) 昭和16年 4月16日付)	太平白菜	
4 表	新聞切抜き 1 枚 (〔南京大陸新報〕「永楽一文銭の文化」(上)) 昭和16年 4月15日付)	太平白菜	19410415
4 裏	新聞切抜き 1 枚 (〔南京大陸新報〕「日本人の手になるパンテタの塔銘②」) 昭和16年 4月24日付)	太平白菜	19410424
5 表	新聞切抜き 2 枚 (〔南京大陸新報〕「日本人の手になるパンテタの塔銘①」) 昭和16年 4月22日付)	太平白菜	19410422
5 裏	式次第 1 枚 (釈迦牟尼仏聖誕連合慶祝大会秩序単)		19410400
6 表	新聞切抜き 1 枚 (〔新民報〕 民国30年 4月29日付「仏誕連合慶祝大会付ノ三日午在天安門上挙行」)		19410429
6 裏	(貼付物なし)		
7 表	絵葉書 2 枚 (蘇州)		
7 裏	絵葉書 2 枚 (蘇州)		
8 表	絵葉書 3 枚 (蘇州)		
8 裏	絵葉書 3 枚 (蘇州)		
9 表	絵葉書 3 枚 (蘇州)		
9 裏	絵葉書 2 枚 (鎮江・蘇州)		
10 表	絵葉書 3 枚 (南京)		
10 裏	絵葉書 3 枚 (南京)		
11 表	絵葉書 3 枚 (南京)		
11 裏	絵葉書 3 枚 (南京)		
12 表	絵葉書 3 枚 (南京)		
12 裏	絵葉書 3 枚 (南京)		
13 表	絵葉書 3 枚 (南京)		
13 裏	絵葉書 3 枚 (南京)		
14 表	絵葉書 3 枚 (南京)		

14裏	繪葉書 3 枚 (南京)
15裏	繪葉書 3 枚 (南京)
15裏	繪葉書 3 枚 (南京)
16裏	繪葉書 3 枚 (南京)
16裏	繪葉書 3 枚 (南京)
17裏	繪葉書 3 枚 (南京)
17裏	繪葉書 3 枚 (南京)
18裏	繪葉書 4 枚 (南京)
18裏	繪葉書 3 枚 (南京)
19裏	繪葉書 3 枚 (南京)
19裏	繪葉書 3 枚 (南京)
20裏	繪葉書 3 枚 (南京)
20裏	繪葉書 3 枚 (南京)
21裏	繪葉書 3 枚 (南京)
21裏	繪葉書 3 枚 (南京)
22裏	繪葉書 3 枚 (南京)
22裏	繪葉書 3 枚 (南京)
23裏	繪葉書 3 枚 (南京)
23裏	繪葉書 2 枚 (南京)
24裏	繪葉書 3 枚 (南京)
24裏	繪葉書 3 枚 (南京)
25裏	繪葉書 3 枚 (南京)
25裏	繪葉書 2 枚 (南京揚子江)
26裏	繪葉書 3 枚 (南京揚子江・中国美術風景)
27裏	繪葉書 2 枚 (中国美術風景)
27裏	繪葉書 2 枚 (中国美術風景)
28裏	繪葉書 3 枚 (杭州)
28裏	繪葉書 3 枚 (杭州)
29裏	繪葉書 2 枚 (杭州)
29裏	繪葉書 3 枚 (杭州)
30裏	繪葉書 3 枚 (杭州)
裏表紙	地図 1 枚 (杭州西湖圖)
裏表紙挟み込み資料	地図 1 枚 (最新杭州西湖全図)

		絵巻書13枚 (蘇州・南京) パンフレット1部 (大阪商船「天津へ」) 画報1部 (大阪朝日新聞附録「熱探検画報」) 書簡図録1部 (上海、軍事郵便)			
--	--	--	--	--	--

明楽寺旧蔵（西厳寺寄託）「亀谷法城資料」

	史料名	数量	形状	著者・発行者	年代	西暦
1	ALBUM 「11/12/13/ no.3/14. かめがひ、」(ペン書)	1冊(台紙30枚/左開き)		亀谷法城	昭和11年～昭和13年	1936：1938
	表紙見返し		(貼付物なし)			
1表			写真1枚(中央仏学院第33回卒業記念写真、昭和11年)			
1裏			写真2枚(院長山崎精華氏、亀谷法城) キャラクションあり			
2表			写真2枚(高橋礼讓君、河上君、池田安信君、猪澤兄) キャラクションあり			
2裏			写真2枚(大島風景) キャラクションあり			
3表			写真5枚(西徳寺幼稚園運動会風景) キャラクション・裏書あり		昭和11年10月25日	19361025
3裏			写真3枚(井上法彦君、石木みつ子君、有田道雄氏) キャラクション・裏書あり			
4表			写真3枚(篠田正成君、参大心、亀谷法城) キャラクション・裏書あり			
4裏			写真5枚(高等科大保展通君、兄、大和分園西徳寺幼稚園) キャラクションあり		昭和12年3月23日	19370323
5表			写真2枚(友原嬢、園児集合写真、院家・宇都宮・飯野正成君、亀谷法城) キャラクションあり		昭和12年3月	19370300
5裏			写真3枚(瓜生津師、石木みつ子、広子、すみ子) キャラクション・裏書あり		昭和12年3月24日	19370324
6表			写真3枚(参大心@西徳寺、多賀山公園、家族写真) キャラクションあり		昭和12年冬	19370000
6裏			写真2枚(兄渡瀧、直方市仏教子ども会児童劇) キャラクション・裏書あり		昭和12年夏	19370000
7表			写真3枚(学院グラウンドキヤノン風景、直方西徳寺サーバント、女教師有吉夏代氏) キャラクションあり		昭和12年7月	19370700
7裏			写真3枚(神戸別院) キャラクションあり			
8表			写真3枚(神戸別院、善立寺) キャラクションあり			
8裏			写真3枚(志水紫朗、布香山宝林寺) キャラクションあり			

9表	写真3枚 (大阪城、姫路城) キャプションあり		
9裏	写真2枚 (播州岩見港、参大心君) キャプションあり		
10表	写真2枚 (京都御所、直方) キャプションあり	昭和12年 8月23日	19370823
10裏	写真1枚 (集合写真) キャプション「昭和十一年夏八月/徳忌寺衆徒として得度した。～」	昭和11年 8月	19360800
11表	写真2枚 (集合写真: 赤松先生・宝城春先生・亀谷柳三、菊花) キャプション「徳山赤松女学校閉校ノ時～」	昭和12年	19370000
11裏	写真2枚 (亀谷法城、女児) キャプションあり	昭和12年 8月21日	19370821
12表	写真5枚 (西徳寺、明山洗文氏、篠田憲照君、神戸風景、神戸夜景) キャプションあり	昭和12年 8月	19370800
12裏	写真2枚、生田神社と寺井一道兄、神戸港) キャプションあり、「名所案内図」1部貼付	昭和13年 1月 3日	19380103
13表	写真1枚 (マレーネ・ゾートリヒ) キャプションあり		
13裏	写真3枚 (寺井一道兄、徳忌寺、山口教区講習会) キャプションあり	昭和13年 8月	19380800
14表	写真4枚 (道源龍老人、伊賀崎武彦、徳山公園、児玉神社) キャプションあり	昭和13年 4月 2日	19380402
14裏	写真2枚 (赤子の亀谷法城、家族写真) キャプション「明治四十三年五月/高知市にて/愛一六才/忠次四才/柳三当才」	明治43年 5月	19100500
15表	写真2枚 (家族写真) キャプション「大正九年夏、次兄を姫路より迎へて(第三十一才)」	大正 9年夏	19200000
15裏	写真4枚 (有田兄、西徳寺、海辺風景) キャプション・裏書あり	昭和11年10月下旬	19361000
16表	写真3枚 (海辺風景・人物)		
16裏	写真5枚 (耶馬溪) 2枚は既製写真		
17表	写真5枚 (耶馬溪) 2枚は既製写真、裏に「スベシアル・フロニー 耶馬溪の景観」という写真解説あり		
17裏	写真4枚 (耶馬溪) 既製写真		
18表	写真5枚 (既製写真) ※17裏に「スベシアル・フロニー 耶馬溪の景観」という写真解説あり		
18裏	写真4枚 (節子、亀谷法城、区長さん、家族写真) キャプションあり	昭和13年 9月	19380900

19表	写真1枚 (徳山仏教会館落慶) キヤフジヨンあり			
19裏	写真3枚 (大心居士、亀谷法城、山本ヨウ女史、松田大氏、明石君、内潟氏) キヤフジヨンあり	昭和13年 7月28日	19380728	
20表	写真4枚 (御霊屋、亀谷法城、春芳氏、繁の秋日、内潟氏) キヤフジヨンあり	昭和13年10月上旬	19381000	
20裏	写真2枚 (男性) キヤフジヨンあり	昭和14年 1月10日	19390110	
21表	写真2枚 (ギターを弾く男性) キヤフジヨンあり	昭和14年 2月 2日	19390202	
21裏	写真3枚 (徳応寺庫裏、亀谷法城、丘君) キヤフジヨンあり ※写真1枚分の剥離真あり			
22表	写真5枚 (女性、男性) キヤフジヨンあり ※1枚剥離写真あり			
22裏	写真3枚 (平田浄蓮寺、内潟氏) キヤフジヨンあり			
23表	写真1枚 (寺院風景by内潟氏) キヤフジヨンあり			
23裏	写真2枚 (亀谷法城) キヤフジヨンあり			
24表	写真2枚 (亀谷法城)			
24裏	写真2枚 (女性と女児)			
25表	写真1枚 (神社風景)			
25裏	写真1枚 (仏教修道講座)	昭和13年 9月	19380900	
26表	写真3枚 (銅像、亀谷法城)			
26裏	写真1枚 (亀谷法城@長門峡龍宮淵) キヤフジヨンあり			
27表	写真5枚 (峡谷風景、亀谷法城)			
27裏	写真2枚 (峡谷風景、亀谷法城)			
28表	写真4枚 (峡谷風景)			
28裏	写真3枚 (智城師と尚ちやん) キヤフジヨンあり			
29表	写真4枚 (吉村君、寺院風景) キヤフジヨンあり	昭和13年	19380000	
29裏	写真5枚 (峡谷風景、亀谷法城) キヤフジヨンあり			
30表	写真4枚 (峡谷風景) キヤフジヨンあり			

<p>30裏 裏表紙挟み込み資料</p>	<p>写真4枚(節子、祖母、礼子兵衛、亀谷法城) キヤンションあり 大判写真3枚 年表1枚(英国侵華年表) 捺摺状2枚(1組か)「本市上乘庵／西本願寺 ／亀谷先生台啓(消印：南京)」 繪葉書1枚(亀谷西三宛：文章あり) 名刺1枚「南京駐在布教使／亀谷法城／南京市 中山東路上乗庵十八号／西本願寺別院／電話 二一八五〇」</p>	<p>亀谷法城</p>	<p>昭和14年-昭和16 年</p>	<p>1939：1941</p>
<p>2 聖蹟記念 14/15/16/ no.4」(ペン書) 表紙見返し 1表 1裏 2表 2裏 3表 3裏 4表 4裏 5表 5裏 6表 6裏 7表 7裏 8表 8裏 9表 9裏 10表 10裏 11表 11裏</p>	<p>1冊(台紙24枚/左開き) (貼付物なし) 写真9枚(学生額写真) 写真1枚(南京風景、寺院) 写真3枚(南京風景、墓) 写真2枚(南京人物) 写真1枚(南京人物) 写真12枚(学生集合写真) 日本か 写真11枚(学生集合写真@京都府相楽郡木津町 懸羅坂神社) 写真5枚(南京風景、中山陵ほか) 写真2枚(学生集合写真) 写真6枚(家族写真) 写真5枚(家族写真) 写真12枚(人物、風景) 日本 写真12枚(人物、風景) 日本 写真11枚(中国風景) キヤンション「S14年 渡支」 写真2枚(人物) 写真1枚(学生額写真) 写真9枚(中国人物写真) 写真12枚(南京風景・学生) 写真7枚(南京風景) 写真7枚(南京風景) 写真12枚(南京風景)</p>	<p>亀谷法城</p>	<p>昭和14年</p>	<p>19390000</p>

11表	写真12枚 (南京風景、人物)		
12表	写真3枚 (南京風景、人物)		
12裏	写真4枚 (南京風景、中国人物)		
13表	写真3枚 (南京風景)		
13裏	写真3枚 (上海人物) キヤフレーションあり		
14表	写真3枚 (上海人物)		
14裏	写真2枚 (日光中禪寺) キヤフレーションあり	昭和18年	19430000
15表	写真3枚 (亀谷法城ら)		
15裏	写真2枚 (学生) キヤフレーション・裏書「亀谷法城親教師記念／楊惠之敬贈／昭和十七年三月一日 撮於京都」	昭和17年 3月 1日	19420301
16表	写真2枚 (南京別院、学生) 裏書「法城親教師記念／小生／普恵贈呈」		
16裏	写真2枚 (学生) 裏書「法城先生記念／張本基敬贈 [朱印：本基]／昭和十七年春」		
17表	写真4枚 (集合写真、大会風景、本派本願寺南京別院建設事務所)		
17裏	写真4枚 (学生、大会風景、家族写真) キヤフレーション「靈之」「堂山夫人」大日本国防婦人		
18表	写真4枚 (谷口法行と小川貫式@南京別院建設事務所、学生) キヤフレーション「靈之」		
18裏	写真4枚 (緒明諒と亀谷法城、葉靈奉安所、南京別院) キヤフレーションあり「緒(マツ) 民諒 外交部長」		
19表	写真6枚 (亀谷法城、赤松氏) キヤフレーション「赤松■太郎」		
19裏	写真7枚 (南京風景)		
20表	写真11枚 (南京別院・棲霞山)		
20裏	写真7枚 (南京風景・棲霞山周辺)		
21表	写真4枚 (棲霞山、南京英靈奉安所)		
21裏	写真2枚 (学生授業風景・学生集合写真)		
22表	写真5枚 (南京風景)		
22裏	写真20枚 (日本教育展覧会(13か))		
23表	写真20枚 (中国風景)		
23裏	写真3枚 (南京風景)		
24表	写真4枚 (南京風景)		

	24巻						
3	南京仏学院だより	1点	写真5枚(南京風景、男性人物) 之「野口/行昭/谷口/多田」	キャンデション		昭和17年4月	19420400
4	学級経営案	1点	校友誌1部			昭和3年・昭和4 年度	1928・1929
5	書簡50通 ※戦前のものに限る	50通				戦前	
6	日記 ※戦前のものに限る	8点	手帳に書きつけられたもの			戦前	
7	手記「智城師のこととも」	1点					



写真2 貫式と法城（向かって右が貫式）

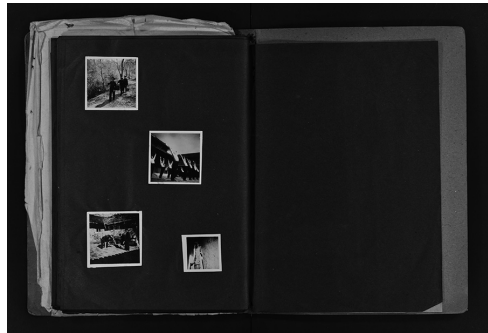


写真1 スクラップブック



写真4 仏学院体操授業



写真3 仏学院教室風景



写真6 学生と法城



写真5 学生と貫式



写真8 南京仏学院集合写真

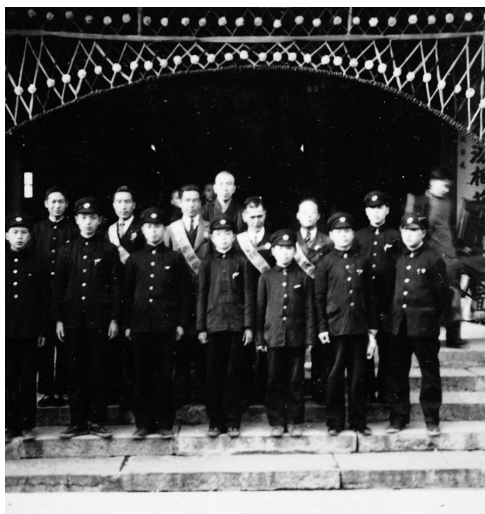


写真7 昆盧寺法要参列



写真10 仏学院第2回入学式

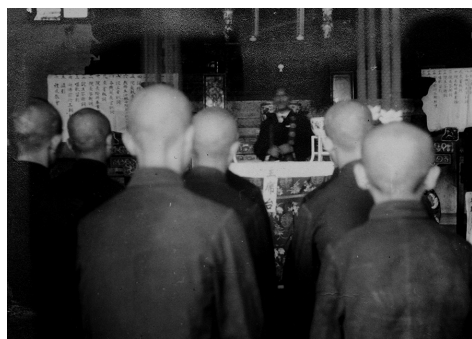


写真9 仏学院第1回卒業式



写真11 仏学院開院式招待状

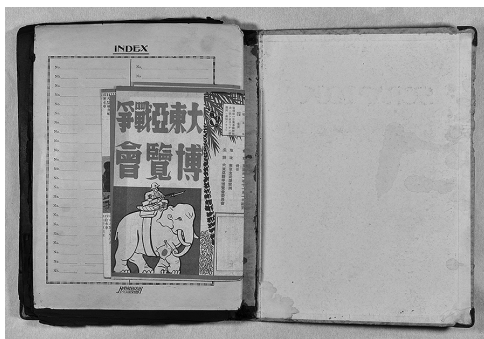


写真12 SCRAPBOOK

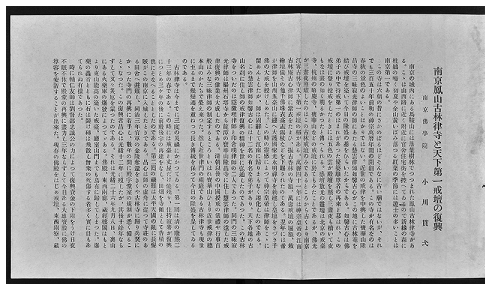


写真14 南京鳳山古林律寺と
天下第一戒壇の復興

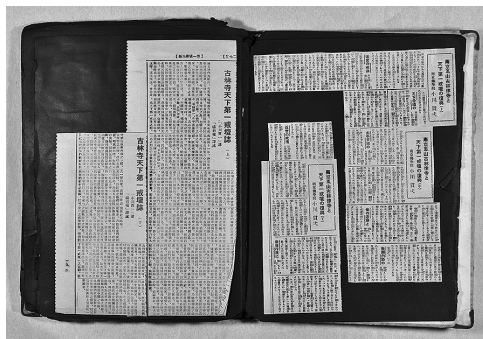


写真13 貫弋新聞記事

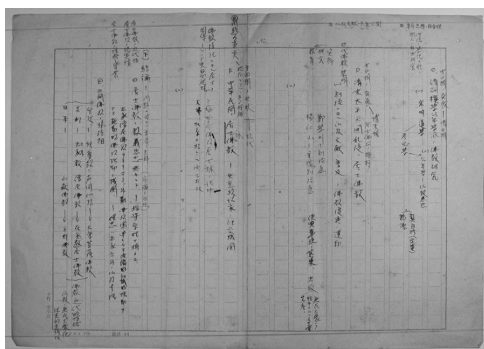


写真15 現代支那に於ける仏教活動
(居士仏教の変遷)

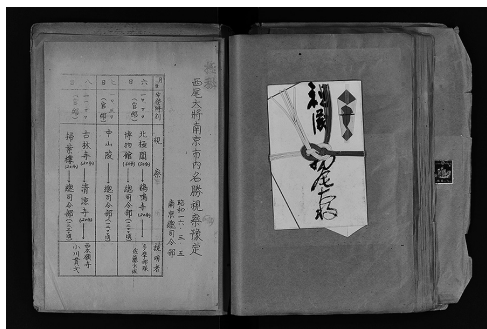


写真17 西尾大将南京市内名勝視察予定

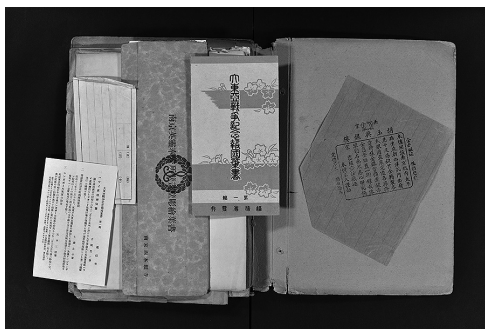


写真16 SCRAPBOOK

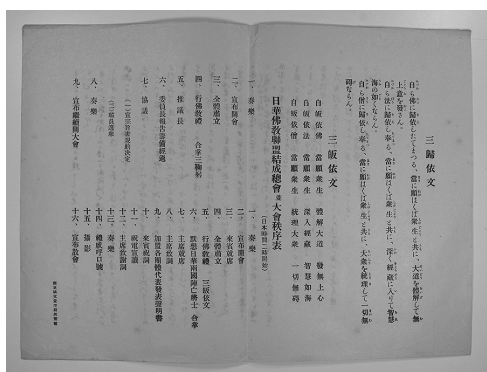


写真19 日華仏教連盟結成総会並大会秩序表

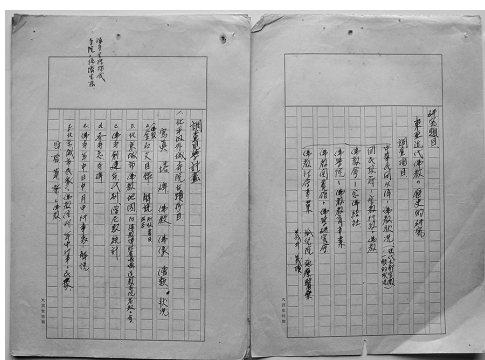


写真18 研究計画

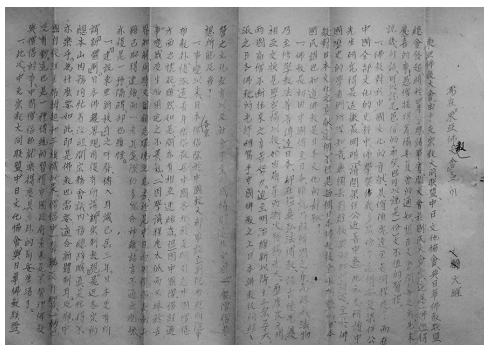


写真20 写在『東亜仏教大会』之前



写真22 棲霞山千仏巖

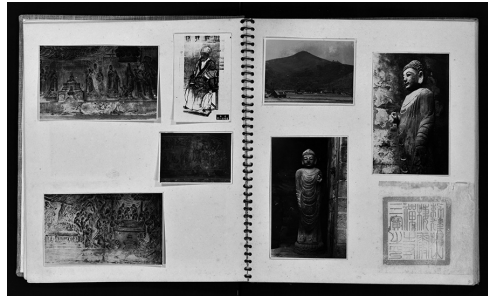


写真21 PHOTOGRAPH ALBUM



写真24 蕭愴碑

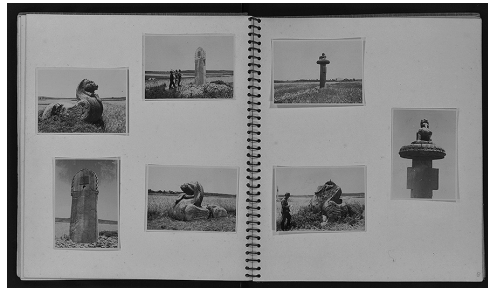


写真23 蕭景墓

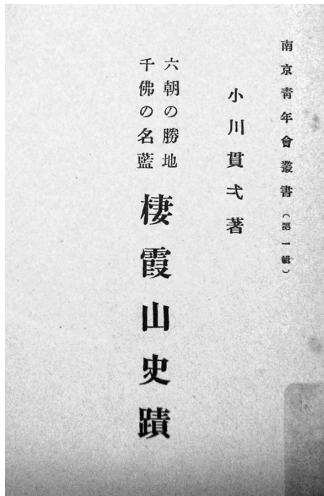


写真26 南京青年叢書
棲霞山史蹟

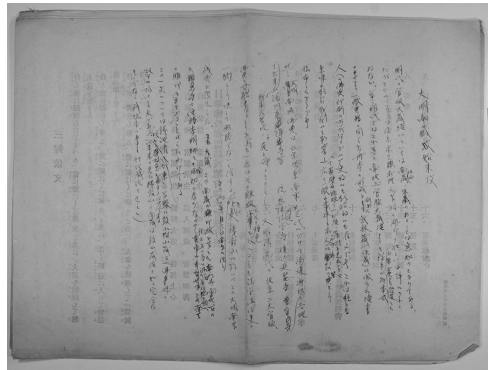


写真25 大明南蔵始末攷

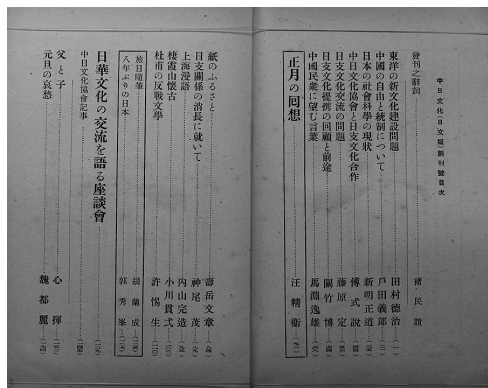


写真27 中日文化創刊号



写真29 椿明誼と法城

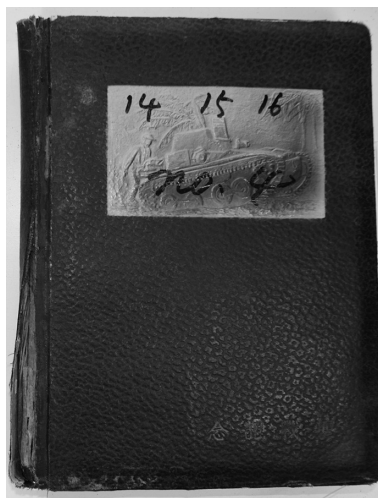


写真28 亀谷法城アルバム (no. 4)



写真31 南京仏学院生による日語大会風景



写真30 仏学院学生



写真32 南京英霊奉安所